

# 中古文学資料解題①

星 瑞 穂

## はじめに

本稿は当館所蔵の資料のうち、平安時代に成立した文学作品（中古文学）および後世に成立したその注釈書について紹介するものである。当館には多くの写本・版本が所蔵されているが、広く一般の利用に供するため、書誌情報・作品解説を加えて掲載する。

今回は『改訂 内閣文庫国書分類目録』から「国文」の項目に挙げられている資料のうち、平安時代に成立したもの、およびその注釈書類を抽出して調査した。なお、このうち挿絵を伴うものについては、すでに『北の丸』四五号（平成二五年）～四九号（平成二九年）に「当館所蔵の「絵入り本」解題①～⑤」として紹介した。

## 【一】「竹採物語」 写年不明 一冊

林家旧蔵 「請求番号特〇六一・〇〇〇七」

本資料は林家旧蔵の『竹取物語』の写本。綴葉装。一冊。

『源氏物語』の「絵合」に、「物語の出来はじめの祖」として挙げられる『竹取物語』は、平安時代のごく初期にすでに成立していたと考えられている

が、作者等も不明で、古写本も少なく、最古の伝存資料の奥書は天正二〇年である。広く流布したのは江戸時代に入ってからで、奈良絵本・絵巻として製作されたことが知られる。

本資料は筆跡から見て江戸時代初期の写本と見られる。料紙も一七世紀の写本に見られる布目紙を用いている。

綴じ穴の跡が八箇所（二組ずつ四箇所）みえるが、おそらく下綴じの綴じ穴であろう。

第一丁目のヤケが強く、表紙がない時期があったと想像される。幕府に儒者として仕えた林家の旧蔵。

## 【書誌】

外題・「竹採物語 全」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・香色布目型押表紙（二六・〇糎×一八・二糎）

料紙・斐紙

行数・每半葉一行

字面高さ・二三・三糎

墨付丁数・三八丁

印記・（表紙）「昌平坂学問所」（一才）「林氏蔵書」「大学校図書之印」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」（三八ウ）「昌平坂学問所」「内閣文庫」

【写年・書写者】

奥書を欠くため写年は不明。筆跡から見て江戸時代前期か。

【二】たけとり物語 写年不明 二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇二七〇〇二二」

前掲資料同様『竹取物語』の写本だが、本文系統は異なる。

本資料は紅葉山文庫の旧蔵で、表紙が改装されているものの保存状態が極めて良い。料紙は楮紙で、袋綴。料紙や装丁は高級とはいえないが、筆跡は美麗で、筆耕の手によるものか。

【書誌】

外題・「竹とり物語 上(下)」中央四周双边刷題簽(一四・三糶×三・二糶)に墨書

内題・「たけとり物語」

表紙・改装浅葱色表紙(二二・〇糶×一五・〇糶)

見返し・(上)左下に蔵書票「日本政府図書」貼付、(下)左下に蔵書票脱落の跡あり

遊紙・(上)一丁、(下)一丁

料紙・楮紙

行数・每半葉一〇行

字面高さ・一六・五糶

墨付丁数・(上)二五丁、(下)二二丁

印記・(上)「日本政府図書」(二才、二五ウ)、(下)「日本政府図書」(一才、二一才)

【写年・書写者】

奥書を欠くため写年は不明。筆跡から見て江戸時代前期か。

【三】竹取翁物語解 天保二年刊 六冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇二一〇三〇九」

本資料は国学者の田中大秀による『竹取物語』の注釈書。五巻首一卷六冊。

『竹取物語』について、書名・成立年代・作者・典拠・諸本について、多角的に研究し、諸項目毎に詳細な注釈を加えたもの。

序・跋を見ると、文政九年に成立し、同一一年に本居大平の序、鈴木胤の跋を加え、天保二年に刊行されたことがわかる。

本資料の場合、第一冊目の見返しに、田中大秀の自序を切り取った頁(二二・三糶×一六・〇糶)が貼付されており、改装の際にやむなくこうした形式にしたものと思われる。すべての冊に遊び紙があり、右下に陽刻印「豊田家蔵」(三・二糶×一・八糶)が捺してあるが、旧蔵者についてははっきりしない。

田中大秀は飛騨高山の菓種商の家に生まれた人物で、尾張熱田で和歌・国学を学んだ。本居大平・本居宣長の薫陶を受け、中古の物語・日記などの注釈を多く記している。弘化四年、七一歳で没。

高山郷土館には、本資料の自筆草稿が所蔵されている。

【書誌】

外題・「竹取翁物語解 首（五）」左肩四周双边刷題簽（一七・八糎×三・七糎）

内題・「竹取翁物語解」

表紙・黄檗色地雲文刷布目型押表紙（二六・二糎×一八・二糎）

見返し・①文政一三年の田中大秀自序貼付（二一・三糎×一六・〇糎）

遊紙・①～⑥各一丁ずつ、右下に陽刻印「豊田家蔵」（三・二糎×一・八糎）あり

料紙・楮紙

匡郭・四周单边（一九・五糎×一四・五糎）

行数・每半葉一〇行

字面高さ・一九・五糎

墨付丁数・①五八丁、②五〇丁、③五四丁、④五四丁、⑤五四丁、⑥五八丁

印記・「豊田家蔵」「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

第六冊目の卷末記載の刊記は以下の通り。

「尾張桐園蔵板／天保二年辛卯初夏／発兌／江戸下谷池之端／須原屋伊八／京堀川通高辻上ル／植村藤右衛門／大坂心齋橋北久太郎町／河内屋喜兵衛（積玉圃）印」／同唐物町／河内屋太助／尾州名古屋本町十丁目／松屋善兵衛（昭華堂記）印」

大坂の河内屋善兵衛、名古屋の松屋善兵衛のみ、号の印が捺してある。

【四】「伊勢物語」 小堀遠州筆 写年不明 一冊

京都学習院旧蔵 「請求番号特〇九一・〇〇〇八」

本資料は小堀遠州自筆の『伊勢物語』写本。綴葉装。一冊。枳形本。藤原定家が天福二年に孫娘のために書写した「天福本」を模写したものと考えられ、本文の字体も定家様で書かれている。

奥書は天福本の元奥書のみだが、「甫」の朱印が捺されていることから遠州自筆と考えられる。小堀遠州は定家様を好んだことで知られ、この当時の流行の一端を担った。

遠州は多くの武功を挙げた武将でもあったが、和歌・書画・茶道などに長けた文人であり、特に茶人・作庭家として名高い。遠州の号は駿府城の普請の際に、その功から遠江守に任じられたことに拠る通称である。正保四年に六九歳で没。

本資料には外題も内題もないものの、後から貼付されたと思われる附箋に『伊勢物語』の書名がある。それぞれ表紙右肩に「伊勢物語 小堀宗甫筆」（五・〇糎×一・一糎）、遊紙の表に「伊勢物語 小堀宗甫筆」（六・二糎×一・五糎）と墨書された付箋が貼付されている。

表紙は常盤色地の織物を用いている。文様は梅枝に鶯。織が一部磨滅している。

見返しは金泥で、表が霞、裏は山の稜線が描かれている。

料紙は斐紙で布目紙を用いている。全体に水損の跡が見え、特に地に染みが残っているが、本文の中心は極めて状態が良い。

本資料は箱に入れられて保存されているが、大きさ（縦二九・〇糎×横二四・〇糎×高さ四・〇糎）から見て元の箱ではないと考えられる。蓋には墨書で「六歌仙／伊勢物語 全」とあることから、別の資料と一緒に保

存するために作られた箱だったことが想像される。この箱書の筆跡は、『小倉山庄色紙倭歌』（特〇三三・〇〇〇五）等、京都学習院旧蔵の資料の箱に散見されるもの。

【書誌】

外題・なし

内題・なし

表紙・常葉色地鶯梅枝文様（織）表紙（一六・二糎×一六・五糎）

見返し・金泥下絵

遊紙・冒頭に一丁、末尾に二丁。冒頭の遊び紙の表には「伊勢物語 小

堀宗甫筆」附箋（六・二糎×一・五糎）貼付、裏右下に「日本政府図書」

蔵書票貼付

料紙・斐紙・布目紙

匡郭・無辺無界

行数・一〇行

字面高さ・一三・五糎

墨付丁数・八一丁

印記・（見返し）「日本政府図書」、（一才）「学習館印」、（八一ウ）「甫」

【写年・書写者】

八一ウの奥書は以下の通り。

「天福二年正月廿日己未申刻／凌桑門之盲目連日風雪之／中遂此書写為授鐘愛之／孫女也／同廿二日校了／宗甫写（印）」

「天福二年」から始まる奥書は藤原定家による本奥書で、本資料がいわゆる「天福本」を書写したものであることを示す。「宗甫写」の墨書の脇に

「甫」の朱印が捺されていることから、小堀遠州自筆とわかる。但し、写年については不明。

【五】伊勢物語 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二二」

本資料は和学講談所旧蔵の『伊勢物語』写本。綴葉装。一冊。

おそらく原装と思われる表紙は紺地に金泥で秋草文様が描かれたもの。

料紙も斐紙を用いており、豪華本に連なる写本である。ただし、題簽はなく、左肩に朱で「伊勢物語」と打付書きされている。

砥粉色の帙（二五・八糎×一八・二糎）に保存されている。帙には左肩に題簽（一七・五糎×三・〇糎）があり、「伊勢物語」と墨書されている。

【書誌】

外題・「伊勢物語 単」左肩打付朱書

内題・なし

表紙・紺地金泥秋草文様表紙（二五・二糎×一八・〇糎）

見返し・特記事項なし

遊紙・なし

料紙・斐紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉九行

字面高さ・二二・〇糎

墨付丁数・七三丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「書籍館印」「和学講談所」(すべて一才)

【写年・書写者】

「抑伊勢物語根源古人説々不同」で始まる根源本の奥書、「合多本所用捨也可備證本」で始まる武田本の奥書、「以祖父卿真筆本不違一字書写」で始まる冷泉為相の識語が記されているが、本資料そのものの写年・書写者を示す奥書はない。

筆跡・料紙などから判断して、江戸時代初期の書写か。

【六】伊勢物語 写年不明 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇三三・〇〇〇二」

本資料は紅葉山文庫旧蔵の『伊勢物語』写本。綴葉装。一冊。

料紙は斐紙で、筆跡も極めて美麗。嫁入り本に類するものである。表紙も赤香色地の布目紙に金泥で菊丸を刷ったもので上等のものであるが、題簽は脱落したとみえ、外題は中央に打付書きされている。

但し、本文が見返し部分から始まっており、改装されていることが窺える。

【書誌】

外題・「伊勢物語」中央打付墨書

内題・なし

表紙・赤香色地金泥菊丸文様(刷)表紙(二五・〇糎×一八・〇糎)見返し・見返し部分から本文が書写されている

遊紙・なし

料紙・斐紙・布目紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字面高さ・一九・〇糎

墨付丁数・七〇丁

印記・「日本政府図書」「内閣文庫」(表見返し)、「内閣文庫」「日本政府図書」(蔵書票)(七〇才)

【写年・書写者】

本資料には「抑伊勢物語根源古人説々不同」で始まる根源本の奥書があるものの、本資料の写年・書写者を示す奥書はない。本文に用いられている料紙が布目紙である点や、筆跡、装丁から判断するに、江戸時代前期の書写と考えられる。

【七】伊勢物語 写年不明 一冊

京都学習院旧蔵 「請求番号特〇四二・〇〇〇二」

本資料は京都学習院旧蔵の『伊勢物語』写本。綴葉装。一冊。

表紙中央には金泥で裝飾された題簽が貼られているが、磨滅しているため、文様がはっきりしない（秋草文様か）。

料紙は斐紙で、見返しには銀切箔を施した豪華本。書写者は不明だが、おそらく筆耕の手によるもの。

#### 【書誌】

外題・「伊勢物語」中央香色地金泥秋草文様題簽（一一・〇糎×三・二糎）に墨書

内題・なし

表紙・紺色表紙（二五・二糎×一七・〇糎）

見返し・銀切箔

遊紙・三丁

料紙・斐紙・布目紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉九行

字面高さ・二〇・六糎

墨付丁数・八一丁

印記・「日本政府図書」（蔵書票）（遊び紙）、「日本政府図書」「学習院印」

「内閣文庫」（二才）、「内閣文庫」（八一ウ）

#### 【写年・書写者】

本資料には、本奥書・奥書ともに記されていないため、正確な写年・書写者は不明。筆跡や料紙、装丁から見て一七世紀頃の書写とするのが妥当と思われる。

#### 【八】伊勢物語 写年不明 一冊

林家旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二五」

本資料は林家旧蔵の『伊勢物語』写本で、鎌倉時代頃に成立した真名本の本文を持つ。袋綴。一冊。

本資料は『伊勢物語』の諸本のうち、真名（漢字）で本文が書かれていることから真名本と呼ばれる系統に属するもので、広く流布している天福本など定家の手による諸本とは、収録している段にも違いがある。

賀茂真淵はその著『伊勢物語古意』において、この真名本を尊重したが、のちに本居宣長がその姿勢を批判している。真名本はその用字方法から鎌倉時代頃の成立であろうと考えられている。

本資料は左肩に題簽が出してあるが、後補と見え、題簽の下に朱で「真名／伊勢物語」と打付書されていた形跡がある。表紙右肩に「昌平坂学問所」の墨印があるほか、「林氏蔵書」などの蔵書印はすべて一才に捺されているが、右下に七・八糎×二・三糎程度の切り取った形跡があり、元々この箇所には捺されていた蔵書印があとから切り取られたことをうかがわせる。本資料は香色の帙（二七・二糎×二〇・六糎）に保存されており、帙の左肩には墨書で「伊勢物語／真名本」と題簽（一九・三糎×三・六糎）が出してある。

全体的に水損によるシミが見られる。六二ウ左下に朱で「羅山山長」と書き込みがある。

#### 【書誌】

外題・「伊勢物語 全」四周双辺刷題簽（一六・六糎×三・〇糎）に墨書  
内題・「伊勢物語」

表紙・栗皮色表紙(二六・八糎×二〇・〇糎)

見返し・特記事項なし

遊紙・なし

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉七行

字面高さ・二一・三糎

墨付丁数・六二丁

印記・「昌平坂学問所」「林氏蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため写年・書写者ともに不明。

【九】伊勢物語 明和六年刊 三冊

林家旧蔵 「請求番号二〇二・〇三二四」

本資料は国学者の建部綾足の手に拠る注釈『旧本伊勢物語』の明和六年版。「考異」を加えて全三冊。

本文については、寛永二〇年に出版された真名本『真字伊勢物語』と比較した上で校合したものであるが、かねてから綾足の偽作説が指摘されている。(本居宣長『玉勝間』など)

建部綾足は俳人として、旋頭歌片歌を俳諧の起源と主張してその復興を唱え、また読本作者として精力的に刊行を重ねると同時に、明和四年に上

京したことをきっかけに国学を講じるようになった。このとき、京都の書肆である風月庄左衛門(沢田一斎)と出会い、明和六年に『旧本伊勢物語』を刊行することになった。

本資料は題簽の脱落のほかは、およそ原装のままである。表紙と巻末に「昌平坂学問所」の墨印が捺されているほか、各冊第一丁目に「林家蔵書」「述斎衡新収記」「日本政府図書」の朱印が見られる。「述斎衡新収記」は林述斎が新収の版本を中心に捺したもので、本資料が述斎の手元にあったことをうかがわせる。寛政九年に林家の蔵書が昌平坂学問所の蔵書扱いとなった際に、「昌平坂学問所」の墨印が捺されたものと想像される。表紙は青磁色の地に栗皮で梅の枝が刷られているもの。

【書誌】

外題・①「旧本伊勢物語 上」打付墨書、②「旧本伊勢物語 下」中央四周双边刷題簽(一九・五×三・二糎)、③「伊勢物語攷異」打付墨書  
内題・「伊勢物語」

表紙・青磁色地梅花文様刷表紙(二七・〇糎×一八・八糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(二〇・二糎×一五・三糎)

行数・八行

字面高さ・二〇・二糎

墨付丁数・①二五丁、②三二丁、③一二丁

印記・「昌平坂学問所」「林家蔵書」「述斎衡新収記」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

本資料には、刊記が第二冊目末尾と第三冊目末尾の二ヶ所にある。それ

それ以下の通りである。

② 『伊勢物語巻下終 明和六年初秋発行 風月荘左衛門』

③ 『明和六年己丑初秋発行 風月庄左衛門』

風月堂は寛永年間から京都二条で活動した書肆で、初代は沢田宗智。本資料の刊行を手掛けた風月庄左衛門は沢田一斎のことで、こうした国学の書物のほか白話小説の訓訳も行っている。

【一〇】伊勢物語髓脳 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇二一〇三三二」

本資料は作者を在原業平の子である在原滋春に仮託して書かれた秘伝書。写年不明。一冊。

『伊勢物語髓脳』は南北朝時代から室町時代頃に成立したと考えられている。『伊勢物語』は在原業平が男女和合を説くために記したものと述べ、「伊勢」の文字を「伊」を女、「勢」を男を表すものとし、陰陽が世界を為しているという考え方を根底にしている。

作者とされている在原滋春は、業平の次男で、在次と称された人物だが、生母・経歴・生没年など多くが不明である。『古今和歌集』に六首が採られ、ほかに『大和物語』にも詠歌が採録されている。『大和物語』の作者とする説もあるが、『伊勢物語』を業平の作とする説から対になるようにして生まれたものだと考えられている。

本資料は斐楮混ぜ漉き料紙に美しい文字で書写されたもので、江戸時代初期頃の手かと想像される。袋綴で装丁されているが、料紙は地厚。水損

の形跡があり、天・地・小口・ノドに大きく染みがある。  
和学講談所旧蔵。

【書誌】

外題・「伊勢物語髓脳」中央無地料紙題簽（二七・八糎×三・五糎）に墨書

内題・「伊勢物語髓脳」

表紙・浅葱色梨地布目型押表紙（二七・五糎×二一・〇糎）

料紙・斐楮混ぜ漉き料紙

匣郭・なし

行数・一〇行

字面高さ・二〇・〇糎

墨付丁数・二四丁

印記・「和学講談所」「書籍館印」「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、不明。

【一一】知頭集 伴直方筆 天保九〇十年写 三冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号二〇二一〇〇二六」

本資料は作者を源経信に仮託して鎌倉時代頃に書かれた『伊勢物語』の注釈書。一般的な書名は『伊勢物語知頭抄』だが、『和歌知頭集』『知頭集』



などの書名がある。

住吉明神の化身の翁が『伊勢物語』の重要性を説き、筆者との問答を通して各章段を詳細に解説するという内容。宮内庁書陵部が所蔵する伝二条為氏筆本が、鎌倉時代後期の写本と考えられており、最も古い写本である。

当館所蔵の本資料は国学者伴直方の手校本。朱書で本文を校合している。第一冊目の見返しには、直方の字で源経信作者説について次のような注記がある。

「清水濱臣云一条禅閣愚見抄に知頭は経信卿の名をかりて擬作せるにや／とておほえ侍るまことにかの卿の筆作ならば定家卿は見給ぬ事はある／ましきを云々との給へりけにさることなから中昔の書なる／事うたかひなし」

ここに言及されているのは一条兼良の『伊勢物語愚見抄』のことで、ここにある通り、序文冒頭に『知頭集』の経信作者説を否定する記述がある。この説を直方に述べたという清水濱臣は、直方と親交があった村田春海の門下の国学者である。

直方の考証に関する著作としては『枕冊子考』などがあるが、『国字考』『以呂波考』など国語学に関する著作が目立つ。文政四年に家督を継ぎ、同七年に大坂具足奉行、天保二年に裏門切手番之頭。天保一三年に五三歳で没した。

本資料は第一丁目に捺された「伴氏家印」の朱印から、しばらく直方の手元にあったことが想像される。末尾に捺された「元治甲子」の印から、元治元年に昌平坂学問所に新収されたことがわかる。

【書誌】

外題・「知頭集 上（中・下）」左肩打付墨書

内題・「知頭集」

表紙・横刷毛目表紙（二三・〇糎×一六・七糎）

見返し・「はしひめかたり／から国物語／やまと物語」（朱書）

「清水濱臣云一条禅閣愚見抄に知頭は経信卿の名をかりて擬作せるにや／とておほえ侍るまことにかの卿の筆作ならば定家卿は見給ぬ事はある／ましきを云々との給へりけにさることなから中昔の書なる／事うたかひなし」（墨書）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・九行

字面高さ・一九・〇糎

墨付丁数・①四〇丁、②六〇丁、③六〇丁

印記・「昌平坂学問所」（表紙・最終丁の二箇所）「元治甲子」（最終丁）

「伴氏家印」「日本政府図書」「浅草文庫」（第一丁目）

【写年・書写者】

本資料の各冊末尾には、直方の手で次のように朱書されている。

① 「天保九年戊戌九月十七日校合畢／伴直方」

② 「天保九年戊戌九月十七日校合畢」

③ 「天保十年己亥三月六日校合畢 伴直方」

これらの記述によれば、直方が天保九年から一〇年にかけて書写したことがわかる。

【一二】伊勢物語愚見抄 写年不明 一冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二二」

本資料は長祿四年に初稿が成立した一条兼良の手に拠る『伊勢物語』の注釈書で、当館所蔵の写本は文明六年の再稿本をもとにしており、文明二年の転法輪三条公敦による元奥書がある。

『伊勢物語愚見抄』は和歌の注釈に関しては簡潔で、歌学よりも物語解釈に重点を置いたものとしても画期的であり、古注を信頼できない説と難じたという点で、『伊勢物語』の「最初の学術的注釈」とも称されている。長祿四年に初稿が完成したが、世に広く流布して以降の物語解釈に影響を与えたのは文明六年成立の再稿本のほうである。

一条兼良は存命中から無双の才人とも五百年来の才とも讃えられた室町時代随一の学者であるが、若くして親族を失い、後見のない身となって政治的には長く不遇をかこった。学者としての名声を得、官位を極めたのは四く五〇代の頃のことである。応仁の乱の際、自身の邸と一条家の文庫「桃華坊文庫」を焼失し、奈良大乗院へと身を寄せた。『伊勢物語愚見抄』はこの頃に訂正増補されたと考えられている。文明一三年、八〇歳で没。

本資料には文明六年、同八年の兼良の奥書が記されているほか、文明二年の転法輪三条公敦による奥書がある。

#### 【書誌】

外題・「愚見抄 全」左肩四周双边刷題簽（一九・一糶×四・〇糶）に墨書

内題・「伊勢物語愚見抄」

表紙・縹色表紙（二七・三糶×一九・三糶）

見返し・「日本政府図書」蔵書票貼付

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・一一行

字高・一九・二糶

墨付丁数・一三四丁

印記・見返しに「日本政府図書」蔵書票

#### 【写年・書写者】

写年・書写者ともに不明。江戸時代の書写か。

#### 【一三】（伊勢物語抄）

天文一六年 一冊  
大学校・大学旧蔵 「請求番号特〇六二一〇〇六」

本資料は天文一六年に書写された『伊勢物語』の注釈。牡丹花肖柏が宗祇の講釈を聞きした『伊勢物語肖聞抄』に基づく内容を持つ。書写者不明。綴葉装。一冊。

およそ内容は『伊勢物語肖聞抄』に似ているものの、藤原定家の奥書を転写するなど必ずしもすべて一致しない。これについては「肖聞を基礎にしたのであらうが、肖柏の没後天文十六年に何人かの手によつて書かれた注釈なのである。純粹の肖聞抄とは云へない」（大津有一『伊勢物語古注釈の研究』明治印刷、昭和二九年）とかねてから指摘がある。

肖柏は連歌作者として後土御門院・勝仁親王（後柏原天皇）の宮廷連歌

で活躍したが、宗祇に師事して『伊勢物語』講釈などの聞書を多く残し、また一条兼良にも学んでいる。若くして隱遁生活に入ったが、中院家を出自とし、かつ優れた和歌・連歌作者でもあったことから重んじられた。『実隆公記』によれば、大永七年に八五歳で没している。

本資料は全体で一七九丁だが、一〇丁目のみ別筆。料紙も異なるとみえ、ほかの本文部分が斐楮混ぜ漉き紙であるのに対し、この部分だけ斐紙。後から補筆として綴じ込まれたか。

一ウに冬嗣から時平までの藤原氏系図が墨書されている。この部分も別筆に見える。

外題は無地料紙題簽に墨書されているが、多くの部分が剥がれている。残っている部分から推測するに元は「肖聞抄」と書かれていたと思われる。

奥書は「此物語古人之説……」から始まる定家の奥書。

#### 【書誌】

外題・「□聞抄」中央無地料紙題簽（一三・八糎×二・五糎）に墨書、一部欠

内題・なし

表紙・紺地金泥秋草文様表紙（二五・五糎×一八・〇糎）

料紙・斐楮混ぜ漉き紙

匡郭・なし

行数・八行

字面高さ・二一・〇糎

（一〇丁目のみ行数一〇行、字面高さ二一・五糎）

墨付丁数・一七九丁

印記・「日本政府図書」「大学蔵書」「内閣文庫」「浅草文庫」（二才）

#### 【写年・書写者】

本資料には在原業平について、本文中に「業平陽成院御時元慶四年五月廿八日五十六にて卒す。今天文十六年にいたりて六百十五年也」とあり、天文一六年の書写であることが推定される。

【一四】伊勢物語「惟清抄」 写年不明 一冊

林羅山旧蔵 「請求番号二〇二一〇三二三」

本資料は清原宣賢が三条西実隆の大永二年の講義を聞き取った『伊勢物語』の注釈書で、林羅山の旧蔵。江戸時代初期の書写。袋綴。一冊。

群書類従本の巻末の実隆の識語によれば『伊勢物語惟清抄』は、実隆の講義を基に宣賢が聞き取った、さらに実隆自身が加点了なものだという。本資料にもこの旨の識語が書写されている。本文注は簡略だが、『伊勢物語愚案抄』などを多く引用する。

清原宣賢は卜部家に生まれ、清原宗賢の養子に入り、経学を家学とする清原家を継いだ。宣賢は清原家に伝わる注を集大成したのみならず、五山僧の講義も参考にして清原家の経学を発展させた。さらには経学のほかに、『伊勢物語惟清抄』をはじめ国学の研究や、字書類の編纂も行っている。天文一十九年に七六歳で没。『伊勢物語惟清抄』の宣賢自筆本が天理図書館に伝わっている。

本資料は林羅山の手沢本で、一丁目に「江雲涓樹」の印が見える。この印は羅山の蔵書印として最も多く用いられたもので、羅山自身が使用したのももちろん、その没後に鷲峯が羅山の遺書に捺印している。そのため捺

印の時期は不明。

【書誌】

外題・「伊勢物語 惟清抄 全」左肩四周双边刷題簽（一七・七糎×三一糎）に墨書（但し「惟清抄」のみ朱書）

内題・「伊勢物語」

表紙・栗皮色表紙（二五・三糎×一八・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・一〇行

字面高さ・二〇・〇糎

墨付丁数・六四丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「林家蔵書」「江雲渭樹」（二才）「昌

平坂学問所」（六四ウ）

【写年・書写者】

本書は実隆の識語のほかには、奥書を欠くため写年不明。

【一五】〔惟清抄〕 写年不明 二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号特〇六二・〇〇〇四」

本資料は、和学講談所旧蔵の『伊勢物語惟清抄』写本。綴葉装。二冊。

漢字片仮名交じりの前掲資料に対し、本資料は漢字平仮名交じり。また本資料の末尾には在原業平の系図や略歴が示されている等、詳細な内容を持つ。

本資料には、本文と同筆で朱の書き入れがあり、見返しには書き入れ（合点）に関する凡例が書写されている。「以京極黄門之本令書写以周桂自之本一校畢」と記されており、これによれば周桂（連歌師、三条西実隆に学ぶ）自筆本によって校訂を加えたもの。

表紙は雲母で唐草文様が刷っており、また題簽の料紙も雲母で亀甲繫が刷り込まれている。本文の筆跡も美麗で、本文料紙にも一部雲母が施されている。

二冊目の見返しに反古紙を用いており、見返しの裏に本文と同じ筆跡で書き損じた形跡が確認できる。

【書誌】

外題・「惟清抄 上（下）」左肩香色亀甲繫雲母刷料紙題簽（一三・八糎×二・七糎）

内題・なし

表紙・砥粉色唐草文様雲母刷表紙（二四・〇糎×一五・五糎）

料紙・斐楮混漉紙・雲母紙

匡郭・なし

行数・一〇行

字面高さ・二〇・〇糎

墨付丁数・①一一一丁、②一四二丁

印記・①「日本政府図書」「書籍館印」「和学講談所」「内閣文庫」(一才)  
「内閣文庫」(二一ウ)、②「日本政府図書」「書籍館印」「和学講談所」  
「内閣文庫」(一才)「内閣文庫」(二四二ウ)

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。

【一六】伊勢物語注 写年不明 二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号特〇六二一〇〇一八」

本資料は九州大学図書館が所蔵する『伊勢物語当流抄』とほぼ同じ内容を持つ『伊勢物語』の注釈書。綴葉装。上下二冊。

伝来する写本はあまり多くはなく、成立・作者など詳細は不明だが、九州大学図書館には唯一奥書があり、寛永一三年の書写だということがわかっていいる。筆跡などから見て、当館所蔵の本資料もその前後の書写と推定される。

内容は古注の説が多くを占め、旧注の影響はあまりうかがえない。

本資料に特徴的なのは縦三三・二糎×横二三・五糎の大本であるという点である。字も大きく、每半葉一行・字高二六・〇糎である。

【書誌】

外題・①なし、②「伊勢物語注」左肩打付墨書

内題・「伊勢物語注」

表紙・香色表紙(三三・二糎×二三・五糎)

料紙・斐楮混ぜ漉き料紙

匡郭・なし

行数・一一行

字面高さ・二六・〇糎

墨付丁数・①七七丁、②七八丁

印記・①「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「書籍館印」「和学講談所」(二才)「内閣文庫」「日本政府図書」(七七才)、②「日本政府図書」「内閣文庫」「浅草文庫」「書籍館印」「和学講談所」(一才)、「内閣文庫」「日本政府図書」(七八才)

【写年・書写者】

本書は奥書を欠くため詳細は不明。

【一七】闕疑抄 慶長年間刊カ 二冊

昌平坂学問所 「請求番号特一一六・〇〇〇三」

本資料は細川幽齋が記した注釈書『伊勢物語闕疑抄』の古活字版である。袋綴二冊。本来は五卷五冊であったものを合冊にして二冊と考えられる。

内容は『惟清抄』同様、三条西実隆の講義を基にしたもので、併せて當時流布していた様々な説を引用して細かな注釈を施しているのが特徴である。八条宮智仁親王への講義のためにまとめられたもので、旧注の集大成といえるものである。

本資料は慶長年間に刊行されたと考えられる古活字版で、昌平坂学問所の旧蔵。

巻末には慶長二年の年記を持つ中院通勝の識語がある。『闕疑抄』は古活字版・整版ともに刊行されているが、この通勝が書写した慶長二年本が凡そ底本となっている。本資料もそのひとつで、寛永年間に出版された無刊記の古活字版は本資料を底本にしている。

本資料には「昌平坂学問所」の墨印のほか、「文政癸未」の朱印が見えることから、文政六年に昌平坂学問所が収集した資料であることが推定される。

#### 【書誌】

外題・①「伊勢物語／闕疑抄 上」左肩打付朱書、②「闕疑抄 下」左肩無地料紙題簽（一九・八糎×三・三糎）に墨書

内題・「闕疑抄」

表紙・浅葱色表紙（二七・〇糎×一九・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一〇行

字面高さ・二二・五糎

墨付丁数・①一四二丁、②一一三丁

印記・①「昌平坂学問所」（表紙）「浅草文庫」「日本政府図書」（一才）

「昌平坂学問所」「文政癸未」（二四二ウ）、②「昌平坂学問所」（表紙）「浅草文庫」「日本政府図書」（二才）「昌平坂学問所」「文政癸未」（一一三ウ）

#### 【刊年・刊行者】

本資料末尾には「御幸町通二条 仁右衛門 活板之」とある。川瀬一馬氏は活字の類似性から、古活字版『平家物語』（一方流本）の刊行者である「河原町 仁衛門」と同一人物と見る。

【一八】闕疑抄 寛永年間カ 一冊

内務省旧蔵 「請求番号特一一六〇〇〇四」

本資料は細川幽斎が記した注釈書『伊勢物語闕疑抄』の古活字版である。袋綴。一冊。

本資料は寛永年間に印刻されたイ種本と呼ばれるもの。活字の磨滅の程度から初版であると考えられている（川瀬一馬『古活字版之研究』一九六七年）。但し、外題には補筆で「慶長版」という墨書がある。小口に破れが見られ、袋綴が開いてしまっている丁が数か所ある。

#### 【書誌】

外題・「伊勢物語闕疑抄 慶長版 全」

内題・「闕疑抄」

表紙・丹表紙（二七・三糎×一九・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・一二行

字面高さ・二〇・八糎

墨付丁数・一九八丁

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」(一才)

および不明陽刻朱印二種(二・五糎×二・五糎、二・二糎×一・一糎)

【刊年・刊行者】

前述のとおり、寛永年間の刊。本資料には慶長二年の年記を持つ中院通勝の識語がある。

【一九】 闕疑抄 寛文八年刊 三冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号二〇二〇三二一〇」

本資料は承応二年に刊行された整版を寛文八年に覆刻したもの。袋綴。五卷三冊。

『伊勢物語闕疑抄』は近世を通して最も多く出版された『伊勢物語』の注釈書のひとつで、古活字版・整版ともに版種が多い。整版のうち刊年がはっきりしているものだけでも、寛永一一年版、寛永一九年版、慶安元年版、承応二年版、万治二年版、万治三年版、寛文八年版、明和六年版等がある。本資料はこのうち承応二年版の覆刻で、巻末の刊記の部分の匡郭が削れており、刊年と版元名を差し換えた形跡がある。

本資料は紅葉山文庫の旧蔵のため、保存状態が極めて良く、また蔵書印等が一切捺されていない。第一冊目の見返し右下に、「日本政府図書」の蔵書票が貼付されている。表紙はごく近年に改装されており、見返し・遊び紙ともに新しい。

【書誌】

外題・「闕疑抄 一二(五)」左肩四周双辺刷題簽(一五・五糎×三・二糎)

内題・「闕疑抄」

表紙・縹色表紙(二六・五糎×一九・二糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周単辺(二一・八糎×一七・〇糎)、無界

行数・一二行

字面高さ・二一・八糎

墨付丁数・①六五丁、②六五丁、③三七丁

印記・①見返しに蔵書票「日本政府図書」貼付

【刊年・刊行者】

③三七ウに刊記あり。

「寛文八戊申ノ年初冬吉日 寺町二条下丁 中村五兵衛」

京の中村五兵衛は、寛永から元禄頃まで活動していた書肆で、寺町通二条下ルのち御池通袋屋町の住所も見える。日蓮宗関連の仏書の出版が多いとの指摘がある(朝倉治彦「私の書賈集覧」『近世文学・作家と作品』中央公論社、昭和四八年)。

【二〇】「伊勢物語闕疑抄」 写年不明 二冊

林羅山旧蔵 「請求番号特〇六二一〇〇一七」

本資料は林羅山旧蔵の『伊勢物語闕疑抄』の写本。袋綴。上下二冊。

本資料の第一冊目（一才）に「江雲渭樹」の印が捺されており、本資料が林羅山の手沢本であったことがわかる。この印は羅山の蔵書印として最も多く用いられたもので、羅山自身が使用したのはもちろん、前述したように、羅山没後に鷲峯が使用したため、捺印の時期は不明である。なお、第二冊目にこの印は捺されていない。上下二冊ともに、末尾に「昌平坂学問所」の墨印が見え、のち昌平坂学問所に収蔵されたことがわかる。

第一冊目（二三丁目）、第二冊目（五二丁目）の袋綴が開いている。特に第二冊目（五二丁目）の場合、本文に切り抜かれた跡がある。その部分には、裏側からまた別の文言を記した紙が貼り付けられており、誤字を訂正するために、袋綴を開いて内側から修正を加えた形跡と見られる。なお見返し裏には、本資料を書写した際の反古紙が利用されている。

#### 【書誌】

外題・「伊勢物語／闕疑抄 上（下）」左肩打付朱書

内題・なし

表紙・紺色表紙（三〇・五糎×二二・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・なし

行数・一〇行

字面高さ・二四・五糎

墨付丁数・①一一四丁、②一〇八丁

印記・①「林家蔵書」「江雲渭樹」「日本政府図書」「浅草文庫」（一才）、  
「昌平坂学問所」（一一四ウ）、②「林家蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」  
（一才）、「昌平坂学問所」（二〇八ウ）

#### 【写年・書写者】

本資料には幽斎の元奥書のほか、写年に関する年記は書かれていない。  
江戸時代初期頃か。

#### 【二一】伊勢物語集註 承応二年刊 一二冊

岸本由豆流旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三三〇」

本資料は一華堂切臨が記した注釈書『伊勢物語集註』の承応二年版で、  
旧蔵者である岸本由豆流の書き入れが見られる。袋綴。一一巻附一卷、全  
一二冊。

切臨は時宗の僧で、『伊勢物語』や『源氏物語』等の中古文学の注釈を多く記した和学者である。京都七条道場で乗阿を師として『古今和歌集』等の講義を受け、晩年には金光寺二十二世住職となった。『伊勢物語集註』は師の乗阿の「奥義」を軸に、『伊勢物語愚見抄』や『伊勢物語闕疑抄』など先行する旧注を適宜引用する形で編集されている。序文に拠れば、当時の愚見抄や闕疑抄の写本には誤り・遺漏が多いため、三条西実澄から「奥義」を受けられた乗阿の教えに則って編んだという。この年記によれば、『伊勢物語集註』が慶安元年に成立したことがわかる。

版種としては、慶安五年版と承応二年版の二種が知られる。本資料は承



応二年版で、慶安五年版の再版に当たる。

本資料は国学者の岸本由豆流の旧蔵。岸本由豆流は村田春海最晩年の門人で、中古文学の注釈を多く記したことで知られるが、同時にその蔵書三万巻とも称されるほどの蔵書家であった。各冊（一才）にその蔵書印である「朝田家蔵書」「岸本家蔵書」の朱印が捺されている。「朝田」は岸本由豆流の旧姓で、のち朝田家を再興した。

本資料は多くの書き入れが見られる。全体的に水損の跡があり、変色している箇所が多い。題簽の脱落が多く、墨書で補つてあるものもある。本資料は明治十年に政府が購入した。

### 【書誌】

外題・①②④⑦⑨⑩「伊勢物語集註 一（〜十）」左肩四周双边刷題簽（一六・六糎×三・〇糎）に墨書、③⑤⑥⑧⑪⑫「伊勢物語集註 三（〜十二止）」左肩四周双边刷題簽（一七・〇糎×三・七糎）が元題簽か。⑥一部欠（無地料紙の題簽に墨書で補つてある）

内題・「伊勢物語集註」

表紙・紺色雷文繫地唐草文様艶出表紙（二七・三糎×一八・二糎）、⑫裏表紙のみ浅葱色表紙。

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一一行

字面高さ・二〇・五糎

墨付丁数・①四三丁、②三八丁、③三八丁、④四二丁、⑤四一丁、⑥三九丁、⑦四四丁、⑧三七丁、⑨四三丁、⑩四四丁、⑪三四丁、⑫二八丁  
印記・①⑫「日本政府図書」「大日本帝国図書印」「朝田家蔵書」「岸本

家蔵書」「明治十年購求」（一才）、①⑫「大日本帝国図書印」（末尾）

### 【刊年・刊行者】

⑫二八才の刊記は以下の通り。

「承応二癸巳年三月吉日／室町通鯉山町／梓行／小嶋弥左衛門／小嶋市郎衛門」

小嶋弥左衛門・小嶋市郎衛門ともに京の室町通鯉山町六角下ルの書肆である。寛永から寛文頃まで活動しており、漢籍の出版が多い。

【二二】後水尾帝御講釈聞書 延享二年写 二冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇二・〇三二二」

本資料は後水尾天皇の講義を聞き取った『伊勢物語御抄』の写本で、延享二年に川島長興が書写したもので、袋綴。二冊。

『伊勢物語御抄』は後水尾天皇の手によるもので、明暦年間頃に成立したと考えられている。『伊勢物語愚見抄』や『伊勢物語闕疑抄』等の先行する旧注から諸説を引用するほか、当流の説など広く参照し、後陽成院の『伊勢物語愚案抄』をさらに発展させた内容とされる。

後水尾天皇は八条宮智仁親王から古今伝授を受け、烏丸光広・中院通村らの『伊勢物語』『源氏物語』等の講義に学んだ。和歌・書・連歌に通じ、また後陽成院の出版事業を引き継いで元和勅版を印行するなど、寛永文化の中心的存在となった。

本資料を書写した川島長興は幕臣。明和二年に家督を継いで小普請とな

る。通称を源八郎。安永五年に五三歳で没(『寛永重修諸系譜』)。

本資料は和学講談所の旧蔵。水損の形跡が全体にみられる。第二冊目の題簽は元題簽と見られ、本文と同筆に見える。一方、第一冊目は題簽が脱落しており、打付書がされているが、これは別筆と見え、後補である。

【書誌】

外題・①「後水尾帝御講釈伊勢物語」左肩打付墨書、②「後水尾帝御講釈伊勢物語 四五／大尾」左肩梅花文様料紙題簽(一六・五糎×四・〇糎)に墨書

内題・「後水尾院帝御講釈聞書」

表紙・赤香色表紙(二三・八糎×一七・〇糎)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一三行

字面高さ・二一・五糎

墨付丁数・①四六丁、②四三丁

印記・①②「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」(一才)

【写年・書写者】

②四三ウに以下の通りの奥書がある。

「延享二年巳五月十五日写功成／川嶋長興」

【二三】(伊勢物語御抄) 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二三」

本資料は前掲資料同様、後水尾天皇の講義に基づく『伊勢物語御抄』の写本で、諸本のうち「内閣文庫本」として紹介された写本である。(大津有一『伊勢物語古註釈の研究』(昭和二十九年、石川国文学会) ほか)

元奥書は宝永三年の年記になっているが、本資料の写年ははっきりしない。元奥書には「比しも宝永の三初春既望の■にして／草を止■／里見／遷義堂／義貫」(■は判読不能)とあるが、「本ノママ」という傍注があることから転写であることが窺える。「里見義貫」についても伝未詳。

【書誌】

外題・「伊勢物語抄」左肩無地料紙題簽(二〇・〇糎×三・八糎)

内題・なし

表紙・香色布目型押表紙(二六・二糎×一七・五糎)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一〇行

字面高さ・二一・〇糎

墨付丁数・九〇丁

印記・(一才)「書籍館印」「日本政府図書」「和学講談所」「浅草文庫」

【写年・書写者】

元奥書が宝永三年の年記を持つことから、少なくともこれ以降の書写。

【二四】伊勢物語拾穂抄 「延宝八年刊」 二冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇一・〇六二〇」

本資料は延宝八年に刊行された北村季吟による注釈書『伊勢物語拾穂抄』の無刊記版。袋綴。五卷二冊。

注釈の内容は『伊勢物語闕疑抄』を中心に、季吟の師である松永貞徳の説を加え、旧注の諸説を整理したものとなっている。『闕疑抄』のほかには『伊勢物語愚見抄』『伊勢物語肖聞抄』『伊勢物語惟清抄』などが引用されている。「頭注」「側注」「傍注」などを配した形式は、『湖月抄』や『枕草子春曙抄』で季吟が確立したもので、この『拾穂抄』にも引き継がれている。

北村季吟は飛鳥井雅章・清水谷実業に和歌・歌学を学んだ。松永貞徳の門で俳諧師として名を為すものの、天和三年に京都新玉津島神社の社司となつてからは和歌・古典の注釈に専念している。元禄二年、息子の湖春とともに幕府歌学所に召され、のち法印。宝永二年に八二歳で没。

『伊勢物語拾穂抄』は寛文三年以前に成立。延宝八年に刊行されたとみえ、「延宝八年庚申仲秋吉辰／長尾平兵衛開刊」と「延宝八年庚申仲秋吉辰／藤野九郎兵衛梓」のいずれかの刊記を持つものが多く現存している。当館所蔵の本資料は無刊記版。

本資料は明治一三年に政府が購入したもの。旧蔵者のものと思われる蔵書印「東■書屋」（陽刻印、四・〇糎×一・七糎）（■は判読不能）が捺されている。

【書誌】

外題・「伊勢物語拾穂抄 上(下)」左肩無地料紙刷題簽(一九・〇糎×

三・七糎)

内題・「伊勢物語拾穂抄」

表紙・紺色表紙(二七・〇糎×一九・三糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(二二・二糎×一七・三糎)

行数・一二行

字面高さ・二二・二糎

墨付丁数・①四四丁、②五七丁

印記・(二才)「大日本帝国図書印」「明治十三年購求」「六四八五番」「東■書屋」

【刊年・刊行者】

本資料は無刊記版。

【二五】勢語臆断 享和二年刊 四冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇二・〇三一九」

本資料は契沖による注釈書『勢語臆断』の享和二年版。四卷四冊。袋綴。契沖の『勢語臆断』は元禄五年秋頃に成立し、写本として流布したが、成立から一〇〇年以上を経た享和二年春になって初めて刊行された。本資料はその享和二年版に相当する。ほかに版種としては、享和三年版や嘉永二年版などが知られる。書名は『伊勢物語』に臆測を加える「意」。

それまで在原業平の一代記として読まれてきた『伊勢物語』について、

虚実の入り混じる作り物語であることを示し、史実と虚構についてそれぞれ分析を加えたという点で、研究史に画期をもたらした注釈である。和漢の古典籍を広く参照・引用し、古注にも目を配っているという点で客観性の保たれた内容であると評価されている。

契沖は若くして阿闍梨位を得、大坂生玉の曼陀羅院住職もつとめたものの、それに伴う俗務を厭ってか寺を棄てて各地に遊んだ。このとき寄寓先で和漢の古典籍に触れたことで、国学者としての基礎を得たと考えられている。元禄年間以降に『万葉代匠記』ほか多くの著作を書き上げ、後世に大きな影響を与えた。元禄一四年に六二歳で没。

本資料は和学講談所の旧蔵。

#### 【書誌】

外題・①③④「勢語臆断 上之上（下之下）」無地料紙刷題簽（一八・八糎×三・六糎）、②「勢語臆断 上之下」後補四周双边刷題簽（二七・二糎×三・七糎）に墨書

内題・なし

表紙・紺色布目型押表紙（二六・〇糎×一八・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一二行

字面高さ・二二・〇糎

墨付丁数・①七〇丁、②五二丁、③七一丁、④八一丁

印記・「日本政府図書」「浅草文庫」「書籍館印」「和学講談所」

#### 【刊年・刊行者】

本資料の刊記（④八一ウ）には「享和二年春」の年記が見えるものの、版元については記載がない。

#### 【二六】「勢語臆断」 写年不明 四冊

岸本由豆流旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二六」

本資料は『勢語臆断』の写本で、岸本由豆流の旧蔵書。袋綴。四冊。第一冊目の三才、第四冊目の一才に「岸本家蔵書」の印が見られることから、岸本由豆流の旧蔵であることがわかる。明治一三年に政府が購入した。

本資料は本文のほかに朱書で書き入れがある。

#### 【書誌】

外題・「伊勢物語抄 一（下四）」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・香色表紙（二七・四糎×一八・八糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一二行

字面高さ・二〇・八糎

墨付丁数・①五二丁、②六六丁、③五一丁、④六四丁

印記・①②③④「大日本帝国図書印」（二才・各冊末尾）「日本政府図書」

「明治十三年購求」(二才)、①④「岸本家蔵書」(①三才、④一才)

【写年・書写者】

本資料には奥書が記されていないため、写年・書写者ともに不明。

【二七】伊勢物語古意 [寛政五年刊] 六冊

本堂親知旧蔵 [請求番号二〇二一・〇三二五]

本資料は賀茂真淵の『伊勢物語古意』の寛政五年版。袋綴。六冊。

書名は、当流の説だけでなく古意を失ってはならないという意図による。

『勢語臆断』などの説をさらに進めた内容を持つ。特筆すべき点は、真名本を底本に使用している点で、定家本系から離れて解釈を行っているのは注釈史上極めて特異。但し本居宣長はこの点について『玉勝間』で批判を加えている。

成立したのは宝暦三年頃で、真淵自筆本の存在が知られている。本資料は上田秋成が校を加えた寛政五年版で、秋成の『よしやあしや』と同時に刊行された。

賀茂真淵は荷田春満の門に学び、後嗣の在満と共に研鑽を積んだ。延享三年に「和学御用」をもって田安家に出仕し、以降、復古主義・万葉主義を強めていき、その円熟した頃に成ったのが『伊勢物語古意』である。真淵は幼少期から複雑な家庭事情の中に育ち、成人して以降もなお複雑な環境に身を置いていたせいか、交遊した人物は多岐に渡る。上田秋成もそのうちのひとりである。

本資料の各冊一丁目には「本堂親知蔵書」(二・四糶×二・八糶)の朱印を見ることが出来る。本堂親知は南部藩士で、檜山隆膺・井上文雄らに学んだ国学者である。通称を時治・官治。加藤千蔭風の書を能くしたこと知られ、明治維新以降は師範学校の国文教授を務めた。明治四二年に八六歳で没。

但し、本資料には一丁目と末尾の料紙に、二糶×一・五糶程度の長方形の墨塗りがあり、本堂親知以前の旧蔵者の印が捺されていた可能性がある。

【書誌】

外題・「伊勢物語古意 一(一六)」中央無地料紙刷題簽(一七・五糶×三・四糶)

内題・なし

表紙・縹色布目型押表紙(二七・〇糶×一八・五糶)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一三行

字面高さ・二一・〇糶

墨付丁数・①四八丁、②三〇丁、③三二丁、④三一丁、⑤三〇丁、⑥三二丁

印記・「本堂親知蔵書」「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」不明墨印(一・〇糶×〇・八糶)

【刊年・刊行者】

本資料は刊記を欠くが、版種から見て寛政五年版であると考えられる。後述の『よしやあしや』(請求番号二〇二一・〇三二七)と同時に刊行された

もので、刊記はこの末尾に記載されている。

墨付丁数・①四八丁、②三三丁、③三六丁、④三七丁、⑤五九丁、⑥四二丁

印記・①②③④⑤⑥「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」(二才)、⑥墨印「泉喜」(一・二糎×〇・七糎)(裏見返)

【二八】伊勢物語古意 写年不明 六冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二四」

本資料は賀茂真淵の『伊勢物語古意』を書写したもので、取り合わせ本。

袋綴。六卷六冊で、第五冊目のみ別筆。

本資料の表紙は砥粉色地に秋草文様を刷ったものだが、第五冊目のみ縹色の表紙がつけられている。本文の筆跡も異なっており、取り合わせ本であると想像できる。但し、大きさや印記は他の冊と同じで、和学講談所に収蔵された際にはすでにこの状態だったのかもしれない。

第四冊目の題簽は脱落、表紙には「四」とだけ打付書されている。

#### 【書誌】

外題・「伊勢物語古意 卷(く六)」左肩無地料紙題簽(一九・三糎×三・

六糎)に墨書

内題・「伊勢物語古意」

表紙・砥粉色地秋草文様(刷)表紙(二六・八糎×一八・〇糎)(⑥紺色

表紙)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一二行(⑥九行)

字面高さ・一九・五糎

【写年・書写者】  
本資料は奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明である。

【二九】よしやあしや 寛政五年刊 一冊

本堂親知旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二七」

本資料は上田秋成の手による『伊勢物語』の注釈『よしやあしや』の寛政五年版。袋綴。一冊。

寛政五年版『よしやあしや』は、前掲の寛政五年版『伊勢物語古意』に併せて刊行されたものである。内容は『伊勢物語古意』の補説として五十ニヶ条の問題を挙げて論じるというもの。概ね『伊勢物語古意』著者の賀茂真淵の説に沿っているが、自説を展開している部分もある。上田秋成は明和頃に加藤宇万伎に師事し、賀茂真淵風の国学を修めている。『雨月物語』などの著作から読本作者として知られるが、国学者としての業績も多く、天明頃に本居宣長と論戦を繰り広げたことでも知られる。本資料を刊行した寛政五年頃はちょうど京に隠棲した時期に相当する。

本資料は本堂親知の旧蔵で、蔵書印の位置や装丁が前掲の『伊勢物語古意』(請求番号二〇二一・〇三二六)と共通している点から見て、両者がツレ

であることがわかる。一丁目と末尾の料紙に、二糎×一・五糎程度の長方形の墨塗りがあある点も共通している。

【書誌】

外題・「よしやあしや」中央無地料紙刷題簽（二五・二糎×三・二糎）※

上部一部欠

内題・なし

表紙・縹色布目型押表紙（二七・〇糎×一八・五糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一三行

字面高さ・二一・五糎

墨付丁数・二三丁

印記・「本堂親知蔵書」「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図

書」不明墨印（一・〇糎×〇・八糎）

【刊年・刊行者】

二三才の刊記は以下の通り。

「寛政五年癸丑秋九月／書肆 東都 西村源六／浪花 増田源兵衛／同

渋川与左衛門」

江戸の西村源六は文刻堂、『桃青句集』の版元。大坂の増田源兵衛は文粹堂。大坂の渋川与左衛門は、上田秋成が校訂した『大和物語』の版元で秋成と関係が深い。

【三〇】参考伊勢物語 文化一四年刊 三冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二六」

本資料は屋代弘賢の『参考伊勢物語』の文化一四年版。袋綴。三冊。

自序によれば文化一〇年の成立。北村季吟の『伊勢物語拾穂抄』のテキストを本文とし、朱雀院塗籠本・為家筆本・真名本などと比較して校合を加えている。真名本以外の写本は当時発見されたばかりの新資料であった点が本資料の特徴的な部分で、また為家筆本に至っては、今日でもその所在を見ず、内容を知る手がかりとしても本資料は貴重であるといえる。序文は塙保己一。

屋代弘賢は国学を塙保己一に、和歌を冷泉為村・為康に学んでいる。文化元年に御興御右筆所詰御勘定格。『参考伊勢物語』を記した頃は、まず文化七年に『古今要覧稿』編纂に着手、同一二年に求古楼展観（古典籍の書誌的研究会）を催す等、精力的に活動していた時期に相当する。

『参考伊勢物語』は上下二冊に附録を併せて三巻三冊。だが、本資料の場合、附録の題簽に「中」と書き込まれ、函架番号も第二冊目として登録されているため、上中下三巻三冊の扱いになっている。附録の末尾に刊記が記載されている点から見ても、附録が第三冊目とするのが正しい。

本資料は内務省の旧蔵。

【書誌】

外題・①「参考伊勢物語」中央朱色料紙四周単辺刷題簽（一一・六糎×三・〇糎）、②「参考伊勢物語附録 中」中央朱色料紙四周単辺刷題簽（一七・一糎×二・〇糎）に「中」のみ墨書（後補）、③「参考伊勢物語 下」中央朱色料紙四周単辺刷題簽（一七・一糎×二・〇糎）

内題・「参考伊勢物語 全部／思頼館蔵板」(※見返し)

表紙・萌黄色地花菱文様艶出表紙(二六・三糰×一八・三糰)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一〇行

字面高さ・二〇・〇糰

墨付丁数・①五二丁、②一四丁、③三七丁

印記・①「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」(一才)「日

本政府図書」(二才)「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」

(五一才)、②「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」(一才)

「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」(二二ウ)、③「大日

本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」(一才)「大日本帝国図書印」

「太政官文庫」「日本政府図書」(三七ウ)

#### 【刊年・刊行者】

第二冊目附録の末尾の刊記は以下の通り。

「文化十四年仲春刻成／京都書林 堀川高辻上ル 植村藤右衛門／製本

大坂書林 心齋橋安堂寺町 秋田屋太右衛門／弘所 江戸書林 浅草新寺

町 和泉屋庄次郎／池端仲町 須原屋伊八／彫工 朝倉八右衛門」

京の植村藤右衛門は伏見屋で、植村は本姓。錦山堂、玉枝軒とも。大坂

の秋田屋太右衛門は田中氏、号は宋榮堂。和泉屋庄次郎は松沢氏、慶元堂。

元は浅草十軒寺町半兵衛店だったが、文化年間から新寺町本立寺門前に移

る。明治の頃には下谷に移り、明治二三年『東京買物独案内』に載る。須

原屋伊八は北沢氏、青黎閣・文淵堂など。初代は須原屋茂兵衛の奉公を経

て独立した。「版元伊八」の号で狂歌を能くし、文化元年に没している。文

化年間の版本には浅草茅町二丁目の住所が記載されている場合が多く、池  
端仲町と二店あった可能性が指摘されている。

【三一】伊勢物語残考 文化五年刊 三冊

内務省旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二七」

本資料は国学者の高井宣風による注釈書『伊勢物語残考』の文化五年版。

袋綴。三冊。

本資料は初学者向けに編まれた『伊勢物語』の注釈書で、本文の下に小  
字双行で語釈を載せる。入門書として編まれたため語釈は簡潔で、難解な  
解釈等にはあまり触れていない。跋文によれば、書名に関しては「残考と  
名づけしは故人のもらせしを考故也」とある。

高井宣風は信濃の人で、日野資枝らに和歌を学び、江戸麹町に家塾を開  
いて和歌・歌論を教授した。本居宣長・村田春海・加藤千蔭らと交遊を結  
ぶ。通称は伊十郎、号は春雨亭・和光亭・春和亭など。本資料のほか「著  
書として『万葉集残考』『源氏物語言葉抄』など。天保三年に九〇歳で没。

本資料の末尾には「春雨亭書目録」が付されており、『近世和歌名家集』  
『後違考』などの書名が見える。

本資料は三巻三冊の文化五年版で、ほかに版種は知られていない。外題  
は四周双辺刷題簽で「伊勢物語残考」とあるが、第一冊目のみ墨書で後補  
であることが窺える。表紙もまた砥粉色地に唐草文様を雲母刷したもので  
あるが、第一冊目のみ同じ色の刷のないものに取り換えられている。

本資料は明治一〇年に政府が購入したもの。各冊一才に捺してある「瀬



谷秘笈」の朱印が旧蔵者のものと推定されるが、詳細は不明。

【書誌】

外題・①「伊勢物語残考 上」四周双边題簽（一九・八糎×四・五糎）に墨書、②③「伊勢物語残考 中（下）」四周双边刷題簽（一九・八糎×四・五糎）

内題・「伊勢物語残考」

表紙・①砥粉色表紙（二六・七糎×一八・七糎）、②③砥粉色唐草文様雲母刷表紙（二六・七糎×一八・七糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一〇行

字面高さ・二〇・五糎

墨付丁数・①四一丁、②四四丁、③四五丁

印記・①③「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十年購求」「瀬谷／秘笈」（陽刻印、三・〇糎×二・八糎）（一才）、①③「大日本帝国図書印」（末尾）

【刊年・刊行者】

③四五才記載の刊記は以下の通り。

「春雨亭蔵書／文化五年十二月 門人 今樹／杜風／常安 発行／彫工細字茂八」

【三二】「伊勢物語抜歌」 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇二一・〇三二一」

本資料は『伊勢物語』の和歌を抜粋した資料で、和学講談所の旧蔵。袋綴。一冊。

和歌は第一段「初冠」の「春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず」から、最後の「つゐにゆく道とはかねて聞きしかどきのふ今日とは思はざりしを」まで、章段の順序に従って配列されている。章段の順序は流布本に準拠したものと推定される。

本資料は一才に「和学講談所」の墨印が見える。奥書はない。裏見返しには反古紙が使用されている。

【書誌】

外題・「伊勢物語抜歌 全」四周双边刷題簽（一七・二糎×三・五糎）に墨書

内題・「伊勢物語」

表紙・香色布目型押表紙（二六・五糎×一八・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一〇行

字面高さ・一九・五糎

墨付丁数・一〇丁

印記・「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和学講談所」（一才）

【写年・書写者】

本資料は奥書を持たないため不明。

【三三】大和物語 慶安元年刊 二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇二七・〇〇一五」

『大和物語』は『伊勢物語』の影響下に成立した歌物語のひとつで、本資料はその慶安元年版。袋綴。二冊。

『大和物語』は『伊勢物語』同様、作者・成立年代ともに未詳である。宇多天皇の周辺の人物が登場人物として描かれることが多いため、宇多天皇に仕えた女房やその周囲の人物を作者とする説が有力で、一条朝には現行の形に整っていたと推定される。書名の由来についても諸説あり、唐に対する日本の物語とする説、伊勢に対する大和の物語とする説など指摘されているが未詳。

『伊勢物語』と比較すると、具体的な登場人物や状況が多く、著名な人物の秘話・裏話的な内容を好む傾向があり、俗世間的であると評されることが多い。物語後半は、姥捨山・処女塚など民話的な内容が中心となり、この点も『伊勢物語』とは大きく異なる。

伝本は主に二つに大別され、藤原定家・為家・為氏の書写・校合を経た二条家本系統と、藤原清輔・顕昭の著作に逸文が残る六条家本系統で、慶安元年版の本文はこのうち二条家本系統に分類される。本資料含め、流布している本文の多くは二条家本系統である。

『大和物語』の版本は、慶安元年版の前に数種の古活字版が知られる。

整版では本資料の慶安元年版のほか享和三年版など。

本資料は紅葉山文庫の旧蔵で、「秘閣図書之章」の印が二種捺されている。状態は極めて良い。表紙・題簽は後補と推定される。

【書誌】

外題・「やまと物語 上(下)」四周双辺刷題簽(二八・〇糎×三・八糎)  
内題・「大和物語」

表紙・縹色表紙(二六・八糎×一九・〇糎)

見返し・①「日本政府図書」蔵書票貼付

遊紙・②一丁

料紙・楮紙

匡郭・四周単辺(二〇・八糎×一六・〇糎)

行数・一二行

字面高さ・二〇・八糎

墨付丁数・①五一丁、②四一丁

印記・①「秘閣図書之章」(長方朱印)「日本政府図書」(一才)「秘閣図書之章」(正方朱印)(一ウ)「日本政府図書」(五一才)、②「秘閣図書之章」(正方朱印)「秘閣図書之章」(長方朱印)「日本政府図書」(一才)

【刊年・刊行者】

四周双辺の枠(九・八糎×三・五糎)内に刊記あり(②四一ウ)。

「慶安元孟春仲旬ノ二条通玉屋町村上平樂寺開板」

版元はこの頃、二条通玉屋町烏丸西入北側に店を構えていた村上勘兵衛のこと。本姓を井上氏。高野山御用、法華宗御用。明治には官板御用。現在の平樂寺書店(中京区東洞院三条上ル)。

【三四】大和物語 慶安元年刊 二冊

林鷺峯旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇六三」

本資料は、前掲資料（請求番号特〇二七・〇〇一五）と同じ『大和物語』の慶安元年版で、林鷺峯の旧蔵。袋綴。二冊。

本資料の上巻に「弘文学士院」の陰刻印が見え、これによって林鷺峯の旧蔵だったことが知られる。また「昌平坂学問所」の墨印も見られることから、林家から昌平坂学問所の所蔵となったことがうかがえる。

状態は紅葉山文庫旧蔵の前掲資料よりはやや劣り、全体的に虫損がある。表紙は後補か。

【書誌】

外題・「やまと物語 上(下)」左肩打付墨書

内題・「大和物語」

表紙・鉄色表紙(二七・〇糎×一七・五糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(二〇・八糎×一六・〇糎)

行数・一二行

字面高さ・二〇・八糎

墨付丁数・①五二丁、②四一丁

印記・①「昌平坂学問所」(表紙)「林氏蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」「弘文学士院」(一才)「内閣文庫」(一ウ)「内閣文庫」(五一才)「昌平坂学問所」(五一ウ)、②「昌平坂学問所」(表紙)「林氏蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」(二才)「昌平坂学問所」(四一ウ)

【刊年・刊行者】

本資料には、前掲資料と同じ刊記がある。(②四一ウ)

「慶安元孟春仲旬／二条通玉屋町村上平楽寺開板」

版面から見ても、本資料は前掲資料と同版であると考えられる。

【三五】大和物語 享和三年刊 二冊

浜松藩克明館旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇六二」

本資料は『大和物語』の享和三年版で、浜松藩校克明館の旧蔵。袋綴。二冊。

享和三年版は、先行する慶安元年版とは体裁が異なっており、無辺無界でより写本に近い版面である。校訂は上田秋成。

上下二冊ともに見返しと本文末尾には蔵書印として「克明館文庫印」が捺されており、また本文部分冒頭二丁・末尾二丁に横型の「克明館蔵書」の印も見える。この蔵書印は浜松藩校の克明館で使用されていたもの。

克明館は弘化二年の設置で、教官としては名倉松窓(予何人)が著名である。近世後期に藩の財政が大きく傾いた際、人材養成・登用が急務となり、水野忠邦の時代に藩校として経誼館が設置された。それに引き続き、井上正春・正直の時代に設置されたのが克明館である。町人の子弟にも門戸が開かれていたことで知られる。

【書誌】

外題・①「やまと物語」中央打付墨書、②「やまと物語 下」中央無地

料紙題簽（二六・五糎×三・八糎）

内題・「大和物語」

表紙・縹色布目型押表紙（二五・五糎×一七・八糎）

見返し・①②「克明館文庫印」

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一二行

字面高さ・二〇・〇糎

墨付丁数・①四二丁、②四一丁

印記・①「克明館文庫印」（見返し）「克明館蔵書」「大日本帝国図書印」

「太政官文庫」「日本政府図書」（一才）「克明館蔵書」（二才・三才・三九

ウ・四〇ウ）「克明館蔵書」「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府

図書」（四一ウ）「克明館蔵書」（四二才）、②「克明館文庫印」（見返し）「克

明館蔵書」「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」（一才）「克

明館蔵書」（二才・三才・三九ウ・四〇ウ）「大日本帝国図書印」「日本政府

図書」「太政官文庫」（四〇ウ）「克明館文庫印」（四一才）

### 【刊年・刊行者】

本資料末尾四一才の刊記は以下の通り。

「享和三年癸亥正月／書肆 東都 西村源八／浪花 渋川与左衛門」

江戸の西村源八は本資料のほか、寛政五年に俳書「とをかはず」を出版している。大坂の渋川与左衛門は前掲の『よしやあしや』の版元にも名を連ねており、上田秋成との所縁を窺わせる。

本資料の刊記の前には、北村季吟の『大和物語抄』の広告が載る。『大和物語抄』は承応二年版のほか、刊年不明版がある。

### 【三六】「大和物語注」

写年不明 三冊

林家旧蔵 「請求番号特〇六二一・〇〇一五」

本資料は室町時代頃に成立したと考えられている『大和物語』の注釈書（古注）で、林家旧蔵。一般的な書名は『大和物語鈔』。袋綴。三冊。

『大和物語』の注釈は近世に入ってから多く作られ、中でも北村季吟の『大和物語抄』（承応二年成立）がその嚆矢と考えられてきた。しかし、本資料はそれよりもさらに成立年代を遡ると考えられ、室町時代の末頃と推定されている。『大和物語』の注釈の中では現存最古。本資料のほかには、国立国会図書館本、山鹿素行文庫本などが知られるが、残存数は極めて少ない。今井源衛氏の「古注『大和物語鈔』考」（『九州大学文学部創立四十年記念論文集』一九六六年）に詳しい。

誤写や単純な誤りが多く見えるが、鑑賞面では優れた内容を持つと評される。特徴的な点は、一般的には全一七三段とされる『大和物語』を、全一二三段としている点で、同じ登場人物の段が続く場合には後の段を「並」として置く。人物単位で物語を整理し、享受する姿勢を見ることができるとして置く。

### 【書誌】

外題・①②③「大和物語 上（下）」左肩打付墨書

内題・なし

表紙・香色地唐草文様（刷）表紙（二九・〇糎×二〇・五糎）

料紙・斐楮混ぜ漉き紙

匡郭・無辺無界

行数・一〇行

字面高さ・二二・〇糎

墨付丁数・①九四丁、②七五丁、③六五丁

印記・①「昌平坂学問所」(表紙)「林氏蔵書」「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」(一才)「昌平坂学問所」「内閣文庫」(九四ウ)、②「昌平坂学問所」(表紙)「林氏蔵書」「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」(一才)「昌平坂学問所」「内閣文庫」(遊紙)、③「昌平坂学問所」(表紙)「林氏蔵書」「大学蔵書」「日本政府図書」「浅草文庫」「内閣文庫」(一才)「内閣文庫」(六五ウ)「昌平坂学問所」(遊紙)

【写年・書写者】

本資料は林鷲峯が書写させたものと推定され、近世前期の書写と考えられる。書写者不明。林家の所蔵を経たあと昌平坂学問所に収蔵された。

【三七】大和物語之抄 承応二年刊 二冊

教部省旧蔵 「請求番号二〇三・〇〇六四」

本資料は北村季吟による『大和物語』の注釈書で、承応二年に刊行されたもの。一般的な書名は『大和物語抄』。別名に『大和物語拾穂抄』。袋綴。

二冊。版種にはほか文化二年版、文政七年版、刊年不明版がある。

近世に成立した『大和物語』の注釈書のうち先駆的なもので、承応元年に成立、同二年に刊行(跋文)。作者、成立年代等に考察を加えている。作者については在原滋春説を取り、のちに花山院の筆が加えられているとした。『大和物語』の書名についても、『袋草紙』の説を引用し、大和歌の道によって書かれた物語の意としている。注釈に使用した本文は群書類従本

系統と呼ばれるテキストだが、巻末に異なる系統の奥書を数種載せている。

本資料には「教部省文庫印」の捺印があることから、教部省の旧蔵であることがわかる。教部省は明治五年に神祇省を改めて発足したもので、明治一〇年に廃止されている。したがってこの印はこの五年間に捺されたもの。さらに本資料には楯田印「宣教使」が見られる。これは明治二年から同五年のあいだ、神祇官に置かれて神道の布教活動を担当した部局の収蔵書に捺された蔵書印で、本資料は神祇官下宣教使から教部省へ移管されたと想像される。また各冊末尾に壺印(陽刻)が捺されているが、詳細は不明。

【書誌】

外題・「大和物語抄 上(下)」四周双边刷題簽(一七・〇糎×三・五糎)

(※「上」「下」は補筆)

内題・「大和物語之抄」

表紙・浅葱色表紙(二六・八糎×一七・八糎)

料紙・楮紙

匡郭・四周单边(二〇・八糎×一五・二糎)

行数・一一行

字面高さ・二〇・八糎

墨付丁数・①一五五丁、②一二八丁

印記・①「宣教使」「教部省文庫印」「図書館文庫」「日本政府図書」「太政官文庫」(一才)「図書館文庫」「太政官文庫」、不明壺印(一五五才)、②「宣教使」「教部省文庫印」「図書館文庫」「日本政府図書」「太政官文庫」(一才)「図書館文庫」「太政官文庫」、不明壺印(一二八才)

【刊年・刊行者】

本資料の末尾に記載の刊記は以下の通り。

「承応二癸巳仲夏吉日／中野小左衛門判」

中野小左衛門は京の書肆で、初代は道也。藤屋、豊興堂、中道舎とも。貞享頃に三条通寺町西入から寺町通五条上ルに店を移している。

【三八】宇津保物語 写年不明 一五冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇二・〇三四六」

本資料は江戸時代初期に書写されたと思われる『うつほ物語』の写本。袋綴。一五冊。一部巻欠。

『うつほ物語』は『源氏物語』に先行して成立した長編の物語だが、信頼のおける本文を持つ古写本はほとんど現存していない。中世に書写されたものでは冒頭の「俊蔭」のみが伝わっており、近世期に入っても広く流布したのは「俊蔭」だけである。それに対し、本資料は、数巻が欠けているもののおよそ全編が揃っている。それに加え、慶長一五年の本奥書を持ち、近世でも早い段階で写されたことがわかっている。諸本系統のうちでは、浜田本系統に分類され、「内閣文庫本」として知られる写本である。本文は朱書で校合が加えられている。また外題は、雲紙料紙の題簽（一五・〇糶×三・二糶）に出してあるが、題号のほか巻名も墨書されている。巻の順序が混乱しているため外題と函架番号にずれがある。

全体に水損あり。火災に遭ったことがうかがえる。和学講談所の旧蔵。

【書誌】

外題・①「うつほ物語 一 としかけ」、②「うつほ物語 十六 ろうの上の下」(※表紙に朱書で「ろうの上の上欠」)、③「うつほ物語 二 ふちわらの口」、④「うつほ物語 十四 くによつり／下」、⑤「うつほ物語 三 たゝこそ」、⑥「うつほ物語 三 并かすかまうて」、⑦「うつほ物語 四 さかの院」、⑧「うつほ物語 四 并祭のつかひ」、⑨「うつほ物語 五 吹上／上」、⑩「うつほ物語 五 并吹上／下」、⑪「うつほ物語 五 并菊の宴」、⑫「うつほ物語 六 あて君」、⑬「うつほ物語 八 おきつ／しら波」、⑭「うつほ物語 十二 くによつり／上」、⑮「うつほ物語 十三 くによつり／中」左肩雲紙料紙（一五・〇糶×三・二糶）に墨書

内題・「宇津保物語」

表紙・紺色表紙（二六・五糶×一九・〇糶）

料紙・斐楮混漉紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字面高さ・二〇・〇糶

墨付丁数・①八一丁、②八八丁、③五九丁、④一二〇丁、⑤三三丁、⑥

一九丁、⑦五七丁、⑧四五丁、⑨四八丁、⑩二四丁、⑪六〇丁、⑫三二丁、

⑬三五丁、⑭九〇丁、⑮八一丁

印記・①～⑮「大学蔵書」「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」「和

学講談所」（一才）

【写年・書写者】

②八八才に以下の通り、本奥書がある。

「本云／此本言葉つつけてには仮名つか／ひ等何れも不審多しといへ共

本／のまゝ令書写後見之憚右之以心／得可有一覽者也／箇庵主人公／其時慶長十五年庚戌三月十四日」

【三九】空物語玉琴 文化二二年刊 二冊

旧蔵者不明 「請求番号二〇二一・〇三五五」

本資料は国学者の細井貞雄によって記された『うつほ物語』の注釈書『空物語玉琴』の文化二二年版。一般的な書名は『宇津保物語玉琴』で、別名に『宇津保物語新釈』。袋綴。二冊。版種としてはほかに安政四年版などがある。

『うつほ物語』が『源氏物語』の源泉となっている点を指摘し、後世の研究に大きな影響を与えた。これに先立つ『宇津保物語玉松』（文化六年成立）で作者を源順とする説をすでに否定しているが、本書ではさらに別の作者を候補として挙げるなど、『玉松』をさらに発展させた内容となっている。本資料は二巻二冊だが、本来は五巻五冊。但し、巻三以降は刊行されておらず、写本でのみ伝わっている。

細井貞雄は本居宣長の門に国学を学び、大炊御門家に有職を学んだ学者である。もとは江戸の人で質商の子として生まれたが、幕府桶大工頭水具師だった細井家の株を買って桶御用を務めていたという。多くの著作を手掛けたのは、文化頃に職を弟に譲って以降のことである。特に『宇津保物語』の研究に尽力し、本書のほか『宇津保物語玉松』や『宇津保物語二阿抄』などを記している。

本資料の一冊目の題簽は脱落している。二冊目は四周单边の刷題簽に「玉

琴 二」と出しており、「日新楼」（二・五糎×一・二）の印が捺してある。旧蔵者のものと思われるが詳細は不明。ほかにも②一才に不明印記あり。匡郭は本文部分のみで、①序文の二丁にはない。

【書誌】

外題・①欠、②「玉琴 二」左肩四周单边刷題簽（一六・二糎×四・〇糎）

内題・「空物語玉琴」

表紙・縹色布目型押表紙（二七・〇糎×一八・三糎）

料紙・楮紙

匡郭・四周单边（一九・八糎×一四・八糎）

行数・每半葉一〇行

字面高さ・一九・八糎

墨付丁数・①四二丁、②四八丁

印記・①一才「日本政府図書」「浅草文庫」「日新楼」、②「日新楼」（題簽）「日本政府図書」「浅草文庫」「日新楼」「□城文庫」（五・〇糎×一・五糎）（一才）

【刊年・刊行者】

②四八才の刊記は以下の通り。

「文化十二年乙亥七月／製本所 江戸中橋広小路 西宮弥兵衛」

江戸の西宮弥兵衛は撰津の人。店はのちに青物町吉兵衛店に移っている。





『落窪物語』は『枕草子』にその名が見え、少なくとも一条朝頃には成立していたと考えられている物語である。継母にいじめられて落ち窪んだ劣悪な部屋に住まわされている主人公「落窪の君」が、貴公子に見初められて幸せを掴むいわゆる継子物語である。滑稽味や下卑た描写が見られるため、『源氏物語』などに比べると品位が劣ると評価されることも多いが、より具象性に優れるとも評価される。

版種は本資料の寛政一一年版のほかには寛政六年版があるが、いずれも本文の質は良くない。現存する写本のほとんどが近世期の書写で、古写本には恵まれず、なおかつ本文の質もそれぞれに問題が見られる。

寛政一一年版の本文は上田秋成が校訂したもので、序文も秋成の手による。本資料は大学の旧蔵で、各冊冒頭の一才に「大学蔵書」の印が捺されている。第一冊目の一一丁目が綴じ間違いのため、天地が逆様になっている。

## 【書誌】

外題・①「落くほ物かたり 一ノ上」②「おちくほもの語 一ノ下」③「おちくほ物語 二ノ上」④「窪説話 二ノ下」⑤「おちくほ物かたり 三

⑥「おちくほ物語 四」無地料紙刷題簽（一八・八糎×四・〇糎）

内題・「おちくほ物語」

表紙・代赭色布目型押表紙（二六・二糎×一八・〇糎）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一〇行（序文は八行）

字面高さ・二〇・〇糎

墨付丁数・①三八丁、②二九丁、③三二丁、④三〇丁、⑤四二丁、⑥四

二丁

印記・①⑤⑥「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」（一才）

## 【刊年・刊行者】

本資料六冊目末尾の四二ウには、二〇・〇糎×六・五糎の枠内に以下の通りの刊記がある。

「寛政十一年己未仲春日／書林 京都 額田正三郎／江戸 須原茂兵衛／同 西村源七／同 西村宗七／大坂 葛城長兵衛」

京都の額田正三郎は、伊勢屋正三郎・額田一止人とも。明治まで存続した書肆である。江戸の須原茂兵衛は、御用も務めた有数の書肆。西村宗七は文化頃には江戸本石町三丁目店があり、文政頃にも存続していたと思われる。大坂の葛城長兵衛は奈良屋長兵衛として知られる。

## 【四二】〔源氏物語〕

〔慶長年間〕刊 五四冊

林鶯峯旧蔵 「請求番号特一三〇・〇〇〇一」

本資料は慶長年間に出版されたと考えられる古活字版『源氏物語』で、いわゆる「伝嵯峨本」である。袋綴。五四冊。

角倉素庵を中心に京都嵯峨で出版された一群の書物を「嵯峨本」と呼び、本資料もまたその「嵯峨本」と考えられてきたが、活字の形式や書体などから、実際には「嵯峨本」から少し遅れて製作された書物（川瀬一馬『古活字版之研究』一九三七年）と推定され、諸説あるものの現在では「伝嵯峨本」と称するのが一般的である。本文は中世以降に流布した青表紙本系

統と考えられ、これ以降の整版に用いられた本文に近い。

本資料の表紙は浅葱色地に雲母で砂子が散らしてある。一部残存する元題簽(「葵」「初音」「胡蝶」「篝火」「真木柱」「夕霧」)も雲母で文様があしらわれた料紙を用いている。題簽が脱落したものは表紙中央に打付け書きされているが、筆跡が二種類ある(「蛭」「若菜下」「東屋」の外題の筆跡と、それ以外の外題の筆跡に分けることができる。)

本資料は全体的に水損によるシミが見られる。特に「桐壺」と「真木柱」は表紙のヤケがひどく、本資料が火災に遭ったことをうかがわせる。現在、本資料は六つの帙(紺色、二八・〇糎×二一・五糎×八・五糎、左肩無地料紙題簽(一八・六糎×三・八糎)に外題「源氏物語 一(く六止)」墨書、七・八糎×九・〇糎の副題簽に巻名が墨書)に分けて保存されているが、元来は「桐壺」「真木柱」がそれぞれ先頭に置かれて保存されていたものと思われる。

本資料の第一冊目一才には林鷲峯の蔵書印である「弘文学士院」の印が捺されている。すべての冊の表紙および本文末尾には「昌平坂学問所」の印が見られることから、林家の所蔵から昌平坂学問所へ移ったことがわかる。「林家蔵書」「大学校図書之印」「浅草文庫」「日本政府図書」の印は各冊一才に捺されているが、「弘文学士院」だけは第一冊目のみ。

第一冊目・第二冊目のみ本文に朱で書き入れがある。

### 【書誌】

外題・①「桐壺」中央打付墨書、②「は、き木」中央打付墨書、③「うつ蟬」中央打付墨書、④「夕顔」中央打付墨書、⑤「若紫」中央打付墨書、⑥「すへつむ花」中央打付墨書、⑦「もみちの賀」中央打付墨書、⑧「花の宴」中央打付墨書、⑨「あふひ」中央草花文様雲母刷料紙題簽(一四・

五糎×三・五糎)、⑩「さか木」中央打付墨書、⑪「花散里」中央打付墨書、

⑫「須磨」中央打付墨書、⑬「赤石」中央打付墨書、⑭「水衛石」中央打付墨書、⑮「蓬生」中央打付墨書、⑯「閑屋」中央打付墨書、⑰「絵あはせ」中央打付墨書、⑱「まつ風」中央打付墨書、⑲「うす雲」中央打付墨書、⑳「朝かほ」中央打付墨書、㉑「乙女」中央打付墨書、㉒「玉かつら」中央打付墨書、㉓「初音」中央草花文様雲母刷料紙題簽(一四・五糎×三・五糎)、㉔「胡てふ」中央草花文様雲母刷料紙題簽(一四・五糎×三・五糎)、㉕「蛭」中央打付墨書、㉖「床夏」中央打付墨書、㉗「篝火」中央草花文様雲母刷料紙題簽(一四・五糎×三・五糎)、㉘「野分」中央打付墨書、㉙「みゆき」中央打付墨書、㉚「藤はかま」中央打付墨書、㉛「真木柱」中央草花文様雲母刷料紙題簽(一四・五糎×三・五糎)、㉜「梅かえ」中央打付墨書、㉝「藤のうら葉」中央打付墨書、㉞「わかかな上」中央打付墨書、㉟「若菜下」中央打付墨書、㊱「柏木」中央打付墨書、㊲「横笛」中央打付墨書、㊳「鈴虫」中央打付墨書、㊴「夕きり」中央草花文様雲母刷料紙題簽(一四・五糎×三・五糎)、㊵「御法」中央打付墨書、㊶「まほろし」中央打付墨書、㊷「にほふみや」中央打付墨書、㊸「こうはい」中央打付墨書、㊹「竹川」中央打付墨書、㊺「橋姫」中央打付墨書、㊻「椎本」中央打付墨書、㊼「総角」中央打付墨書、㊽「早蕨」中央打付墨書、㊾「寄生」中央打付墨書、㊿「東(屋)」中央打付墨書、①「浮舟」中央打付墨書、②「蜻蛉」中央打付墨書、③「てならひ」中央打付墨書、④「夢浮橋」中央打付墨書

内題・なし

表紙・浅葱色雲母砂子表紙(二七・八糎×二〇・五糎)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一一行

字面高さ・二二・〇糎

墨付丁数・①二五丁、②四六丁、③一一丁、④四六丁、⑤四六丁、⑥三一丁、⑦二七丁、⑧一〇丁、⑨四五丁、⑩四八丁、⑪四丁、⑫四二丁、⑬三九丁、⑭三二丁、⑮二二丁、⑯五丁、⑰一八丁、⑱二〇丁、⑲二九丁、⑳二〇丁、㉑四七丁、㉒三九丁、㉓三三丁、㉔二〇丁、㉕一八丁、㉖二二丁、㉗四丁、㉘一九丁、㉙二七丁、㉚二四丁、㉛三六丁、㉜一八丁、㉝三三丁、㉞九四丁、㉟六九丁、㊱三八丁、㊲一八丁、㊳一四丁、㊴七〇丁、㊵一六丁、㊶二〇丁、㊷二三丁、㊸一二丁、㊹七二丁、㊺三六丁、㊻三五丁、㊼八四丁、㊽一八丁、㊾九二丁、㊿六二丁、①六六丁、②五四丁、③六一丁、④一七丁

印記・①⑤④「昌平坂学問所」(表紙)、①⑤④「昌平坂学問所」(本文末尾)、④④「昌平坂学問所」(七二ウ)、①「弘文学士院」「林家蔵書」「大学校図書之印」「浅草文庫」「日本政府図書」(二才)

【刊年・刊行者】

本資料は刊記がないため、はっきりとした刊年・刊行者は不明。筆跡や活字の形式、また題簽の文様などから慶長年間の刊行と推定されている。

(川瀬一馬『古活字版之研究』一九三七年)

【四三】〔源氏物語〕

〔寛永年間〕刊 五四冊

昌平坂学問所旧蔵 「請求番号特一二九〇〇〇二」

本資料は『源氏物語』の古活字版で、寛永年間に印刷されたと推定されるもの。昌平坂学問所旧蔵。袋綴。五四冊。

本資料は、元和九年に開版された『源氏物語』を、寛永年間に入ってから翻印したもので、伝存点数はあまり多くない。いわゆる「寛永古活字版」である(川瀬一馬『古活字版之研究』一九三七年)。元和九年版は前掲の伝嵯峨本に次いで製作されたものと考えられ、本資料はさらにその次の出版に位置する。

本資料は何度か修復を重ねており、五四冊のうち異なる表紙が三種類(香色表紙・栗皮色表紙・代赭色表紙)、またそれに伴って外題の筆跡も三種類あり、それぞれ別の機会に表紙が取り替えられたことを窺わせる。外題の筆跡は以下の三つの組み合わせに分けることができる。

- i. 栗皮色の表紙、外題は中央無地料紙題簽(一五・二糎×二・八糎)に墨書(②③④⑦⑧⑨⑩⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)
- ii. 香色の表紙、外題は左肩に打付書(①⑤⑥⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)
- iii. 代赭色の表紙、外題は中央に打付書(⑮⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)

栗皮表紙にのみ押し八双が残っている。

第二冊目「筥木」の本文には付箋で校訂が加えられている。第四冊目「夕顔」は朱入り。第一八冊目「松風」には、虫除けのイチョウの葉が挟まれている。第二〇冊目「朝顔」の表紙はヤケが見られる。

本資料は昌平坂学問所の旧蔵。表紙と本文末尾に「昌平坂学問所」の墨

印が捺されている。また本文末尾には「文政癸未」の印も見え、文政六年に昌平坂学問所が新収したことがわかる。

【書誌】

外題・①「源氏物語 きりつほ 一」左肩打付墨書、②「はゝ木ゝ 二」中央無地料紙題簽（一五・八糎×三・二糎）に墨書、③「うつけみ 三」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、④「夕かほ 四」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑤「源氏物語 わかむらさき 五」左肩打付墨書、⑥「源氏物語 すえつむ花 六」左肩打付墨書、⑦「もみちの賀」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑧「花のえん 八」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑨「あふひ 九」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑩「さかき 十」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑪「源氏物語 はなちるさと 十一」左肩打付墨書、⑫「源氏物語 すま 十二」左肩打付墨書、⑬「あかし 十三」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑭「みほつくし 十四」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑮「蓬生 十五」中央打付墨書、⑯「せきや 十六」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑰「ゑあはせ 十七」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑱「うす雲 十九」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑲「あさか□」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、⑳「をとめ 廿一」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㉑「玉かつら 廿二」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㉒「源氏物語 はつね 廿三」左肩打付墨書、㉓「源氏物語 こてふ 廿四」左肩打付墨書、㉔「ほたる 廿五」中央無地料紙題簽（一五・

二糎×二・八糎）に墨書、㉕「源氏物語 とこなつ 廿六」左肩打付墨書、㉖「かゝり火 廿七」中央打付墨書、㉗「野分 廿八」中央打付墨書、㉘「みゆき 廿九」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㉙「ふちはかま 三十」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㉚「源氏物語 まきはしら 三十一」左肩打付墨書、㉛「むめかえ 三十二」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㉜「藤のうら葉 三十三」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㉝「□□な上」中央無地料紙題簽に墨書（※一部欠）、㉞「若菜 下 三十五」中央打付墨書、㉟「かしは木 三十六」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊱「よこ笛 三十七」中央打付墨書、㊲「源氏物語 すゝむし 三十八」左肩打付墨書、㊳「夕きり 三十九」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊴「源氏物語 みのり 四十」左肩打付墨書、㊵「まほろし 四十一」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊶「にほふみや 四十二」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊷「源氏物語 こをはい 四十三」左肩打付墨書、㊸「竹川 四十四」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊹「はしひめ 四十五」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊺「しんかもと 四十六」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊻「あけまき 四十七」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊼「さわらひ 四十八」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊽「源氏物語 やとりき 四十九」左肩打付墨書、㊾「あつま屋」左肩打付墨書、㊿「うきふね 五十」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊱「かけろふ 五十二」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊲「手ならひ 五十三」中央無地料紙題簽（一五・二糎×二・八糎）に墨書、㊳「源氏物語 ゆめのうきはし 五十四」

左肩打付墨書

内題・なし

表紙・②③④⑦⑧⑨⑩⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲

④⑤⑥⑧⑨栗皮色表紙(二六・八糎×一八・八糎)、①⑤⑥⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲

③④⑤⑥⑧⑨⑩⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲代赭色表紙(同)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・一一行

字面高さ・二二・〇糎

墨付丁数・①二五丁、②四五丁、③一一丁、④四六丁、⑤四四丁、⑥三〇丁、⑦二七丁、⑧一〇丁、⑨四四丁、⑩四七丁、⑪四丁、⑫四一丁、⑬三九丁、⑭三二丁、⑮三三丁、⑯五帖、⑰一五丁、⑱二〇丁、⑲三〇丁、⑳二〇丁、㉑四八丁、㉒四〇丁、㉓一四丁、㉔二二丁、㉕一九丁、㉖二二丁、㉗四丁、㉘一八丁、㉙二七丁、㉚二四丁、㉛一四丁、㉜三六丁、㉝一八丁、㉞三三丁、㉟三〇二丁、㊱九九丁、㊲三九丁、㊳二八丁、㊴一四丁、㊵三七〇丁、㊶一九丁、㊷二二丁、㊸二三丁、㊹三三丁、㊺三九丁、㊻三七丁、㊼三六丁、㊽八三丁、㊾一八丁、㊿八七丁、①六三丁、②六三丁、③五五丁、④六三丁、⑤一五丁

【刊年・刊行者】

本資料は刊記がないため、はっきりとした刊年・刊行者は不明。

【四四】(源氏物語)

刊年不明 五一冊

書籍館旧蔵 [請求番号二〇三二〇〇〇一]

本資料は書籍館旧蔵の『源氏物語』の整版で、校正が加えられているもの。袋綴。「若紫」「須磨」「明石」の三つの巻を欠くため、全五一冊。

本資料は毎半葉一一行の整版で、本文にふりがななどを欠くいわゆる素源氏。全冊に朱書で校訂が加えられている。白緑色の表紙は全体に水損がみられ、題簽も脱落している冊がある。「空蟬」「末摘花」「若菜下」は題簽が失われているため、鉛筆書で外題が補われている。第六冊目の「紅葉賀」は裏表紙に題簽の跡があり、元は別の冊の表紙だったものを転用したと思われる。第一六冊目の「薄雲」は、本文部分の天地が逆転して綴じられており、何度か改装されていることが想像される。

外題の筆跡には四種類ある。

i. 中央無地料紙題簽(一五・〇糎×三・〇糎)に墨書(①⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)

ii. 中央に打付墨書(④②③③)

iii. 中央に打付朱書(②③⑦)

iv. 鉛筆(③⑤③②)

題簽が残っている場合でも、一部が剥離しているものがほとんどで、本文に比べて表紙の状態は良くない。

本資料は書籍館の旧蔵。

【書誌】

外題・①「きり□□」中央無地料紙題簽（一部欠）、②「箒木」中央打付朱書、③「うつせみ」鉛筆補筆、④「ゆふがほ」中央打付墨書、⑤「すゑつむ花」鉛筆補筆、⑥「もみちの賀」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑦「花のえん」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑧「あふひ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑨「さか木」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑩「はな散里」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑪「みをつくし」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑫「よもぎぶ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑬「せき屋」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑭「ゑあはせ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑮「松かせ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑯「□す雲」中央無地料紙題簽（一部欠）に墨書、⑰「あさかほ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑱「をと□」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑲「玉かつら」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、⑳「はつね」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉑「こてふ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉒「ほたる」中央打付墨書、㉓「とこ夏」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉔「かゝり火」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉕「野分」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉖「みゆき」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉗「ふちはかま」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉘「□き柱」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉙「梅かえ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉚「藤のうら葉」中央無地料紙題簽（一

五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉛「わ□な」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉜「わかな下」鉛筆補筆、㉝「かしは木」中央打付墨書、㉞「よこ笛」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㉟「すゝむし」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊱「ゆふきり」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊲「みのり」中央打付朱書、㊳「まほろし」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊴「にほふ宮」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊵「紅梅」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊶「竹河」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊷「はしひめ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊸「椎かもと」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊹「あけまき」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊺「さわらひ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊻「やとり木」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊼「□□まや」中央無地料紙題簽（一部欠）に墨書、㊽「うきふね」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊾「かけるふ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、㊿「てならひ」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書、①「夢うき橋」中央無地料紙題簽（一五・〇糶×三・〇糶）に墨書

内題・なし

表紙・白緑色表紙（二七・五糶×一八・〇糶）

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一行

字高・一九・五糶

墨付丁数・①二六丁、②五二丁、③一一丁、④四三丁、⑤三三三丁、⑥二九丁、⑦一一丁、⑧四四丁、⑨四五丁、⑩四丁、⑪三三三丁、⑫二二丁、⑬五丁、⑭二〇丁、⑮二二丁、⑯三三二丁、⑰二二丁、⑱四九丁、⑲三九丁、⑳一五丁、㉑二二二丁、㉒二〇丁、㉓二二二丁、㉔四丁、㉕一九丁、㉖二九丁、㉗一四丁、㉘三五丁、㉙二五丁、㉚二四丁、㉛九二丁、㉜九八丁、㉝三九丁、㉞一八丁、㉟二四丁、㊱七二丁、㊲一八丁、㊳二二二丁、㊴一三三丁、㊵一二丁、㊶三九丁、㊷三八丁、㊸三七丁、㊹八六丁、㊺二五丁、㊻八四丁、㊼六二丁、㊽六四丁、㊾五六丁、㊿六五丁、①一六丁

印記・①～⑤①「書籍館印」「日本政府図書」「浅草文庫」(二才)

#### 【刊年・刊行者】

本資料に刊記はなく、刊年・刊行者ともに不明。

#### 【四五】〔源氏物語〕 写年不明 五二冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号特〇一〇〇〇〇二」

本資料は紅葉山文庫旧蔵の『源氏物語』の写本で、江戸時代初期に書写されたと考えられるもの。「関屋」「手習」が欠けているため、全五二冊。

全体に朱書・墨書で校正が加えられている。見返し、一ウ、本文の冒頭部分のいずれかにその巻に関する注釈が書き込まれているのが特徴。表紙は、紺色表紙(二二・五糎×一七・五糎)で、中央に朱色料紙で題簽が貼付されている。題簽の脱落等はなく、全五二冊すべて同じ。

第一冊目の見返しに「日本政府図書」の蔵書票が貼付。全冊の一才に「秘

閣図書之章」印が捺されており、紅葉山文庫旧蔵であることがわかる。

#### 【書誌】

外題・①「きりつほ 一」中央朱色料紙題簽(一一・五糎×二・五糎)、②「はゝ木ゝ 二」(同)、③「うつせみ 三」(同)、④「夕かほ 四」(同)、⑤「若むらさき 五」(同)、⑥「すゑつむはな 六」(同)、⑦「もみちの賀 七」(同)、⑧「はなのえむ 八」(同)、⑨「あふひ 九」(同)、⑩「さか木 十」(同)、⑪「はなちるさと 十一」(同)、⑫「すま 十二」(同)、⑬「あかし 十三」(同)、⑭「みをつくし 十四」(同)、⑮「よもぎふ 十五」(同)、⑯「ゑあはせ 十七」(同)、⑰「松かせ 十八」(同)、⑱「うすくも 十九」(同)、⑲「あさかほ 二十一」(同)、⑳「をとめ 廿一」(同)、㉑「たまかつら 廿二」(同)、㉒「はつね 廿三」(同)、㉓「こてう 廿四」(同)、㉔「ほたる 廿五」(同)、㉕「とこなつ 廿六」(同)、㉖「かゝり火 廿七」(同)、㉗「野わき 廿八」(同)、㉘「みゆき 廿九」(同)、㉙「ふちはかま 三十」(同)、㉚「まきはしら 三十一」(同)、㉛「むめかえ 三十二」(同)、㉜「ふちのうら葉 卅三」(同)、㉝「わかな 上 卅四」(同)、㉞「わかな 下 卅五」(同)、㉟「かしは木 卅六」(同)、㊱「よこふえ 卅七」(同)、㊲「すゝむし 卅八」(同)、㊳「ゆふきり 卅九」(同)、㊴「みのり 四十」(同)、㊵「まほろし 四十一」(同)、㊶「にほふ兵部卿宮 四十二」(同)、㊷「こうはい 四十三」(同)、㊸「竹かは 四十四」(同)、㊹「はしひめ 四十五」(同)、㊺「しゐかもと 四十六」(同)、㊻「あけまき 四十七」(同)、㊼「さわらび 四十八」(同)、㊽「やとりき 四十九」(同)、㊾「あつまや 五十」(同)、㊿「うきふね 五十一」(同)、①「かけろふ 五十二」(同)、②「夢のうきはし 五十四」(同)

内題・なし

表紙・①～②紺色表紙(二二・五糎×一七・五糎)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二〇・〇糎

墨付丁数・①二七丁、②五二丁、③一一丁、④四六丁、⑤四六丁、⑥三〇丁、⑦二五丁、⑧一一丁、⑨四七丁、⑩四五丁、⑪六丁、⑫四二丁、⑬五二丁、⑭三二丁、⑮二二丁、⑯一八丁、⑰二二丁、⑱二九丁、⑲二〇丁、⑳四七丁、㉑四〇丁、㉒二四丁、㉓二〇丁、㉔一八丁、㉕二〇丁、㉖四丁、㉗一七丁、㉘二六丁、㉙二二丁、㉚三五丁、㉛一八丁、㉜二三丁、㉝八九丁、㉞九八丁、㉟三八丁、㊱一八丁、㊲一四丁、㊳六四丁、㊴一七丁、㊵二〇丁、㊶一三丁、㊷二二丁、㊸三八丁、㊹三二丁、㊺三二丁、㊻七七丁、㊼一六丁、㊽七六丁、㊾五六丁、㊿六二丁、①六一丁、②一六丁

印記・①「日本政府図書」蔵書票(見返し)、①～②「秘閣図書之章」(一才)

### 【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。江戸時代初期の書写か。

### 【四六】〔源氏物語〕 写年不明 五四冊

紅葉山文庫旧蔵 「請求番号二〇二一〇三五二二

本資料は紅葉山文庫旧蔵の『源氏物語』の写本で、全体に書き入れが見られるもの。一部錯簡がある。袋綴。五四冊。

表紙は浅葱色でやや大型(二八・〇糎×二一・五糎)、左肩に無地料紙の題簽(一一・三糎×二・五糎)がある。本文部分には朱書・墨書の両方で書き入れがある。見返しや遊紙など本文の直前には、注釈・系図・年立などが書き込まれている。また、本文の内容に項目を立てて小見出しを作り、附箋にして見返し部分に貼付している例もある。巻名を附箋にして貼付しているものもある。

それぞれ附箋の箇所・大きさは以下の通り。

- ⑦見返し「四 紅葉の賀」(一三・三糎×二・五糎)、⑧見返し「五 花宴」(二四・三糎×二・五糎)、⑨見返し「六 あふひ」(一三・二糎×三・〇糎)、⑩見返し「七 さか木」(二三・〇糎×二・三糎)、附箋(二八・〇糎×一五・五糎)、⑪見返し「八 花ちる里」(一四・二糎×二・二糎)、附箋(二二・〇糎×五・五糎)、⑬見返しに附箋(二四・〇糎×一七・五糎)、⑭見返しに附箋(二六・八糎×一六・〇糎)、⑯見返し「十一ならひ関屋」(一四・六糎×二・八糎)、⑰遊紙に附箋(二五・〇糎×一〇・〇糎)、⑱見返しに附箋「三五・〇糎×一〇・〇糎」、⑳遊紙に附箋(一四・五糎×八・五糎)、㉑見返しに附箋(二〇・五糎×七・〇糎)、㉒見返し「はつね」(八・〇糎×二・八糎)、附箋(一四・五糎×四・六糎)、㉓見返しに附箋(九・八糎×五・六糎)、㉔見返し「とこ夏」(八・七糎×二・七糎)、㉕見返し「かゝり火」(六・八糎×二・五糎)、㉖見返し「野分」(七・三糎×二・三糎)、附箋(二二・五



糶×九・三糶)、<sup>29</sup>見返し「御幸」(六・五糶×二・五糶)、附箋(二一・五糶×八・五糶)、<sup>30</sup>見返し「ふちはかま」(六・二糶×二・五糶)、<sup>31</sup>一才に附箋(二四・五糶×一四・五糶)、<sup>32</sup>見返しに附箋(二六・七糶×一五・三糶)、<sup>33</sup>見返しに附箋(二六・八糶×一三・三糶)、<sup>34</sup>見返しに附箋(一六・三糶×一五・八糶)、<sup>35</sup>見返しに附箋(二三・〇糶×一八・八糶)、<sup>36</sup>見返しに附箋(二〇・八糶×二二・五糶)、<sup>37</sup>見返しに附箋(二〇・八糶×九・〇糶)、<sup>38</sup>見返しに附箋(二〇・二糶×六・〇糶)、<sup>39</sup>見返しに附箋(二六・二糶×六・〇糶)、<sup>40</sup>見返しに附箋二ヶ所(一四・五糶×六・七糶)(二五・〇糶×九・八糶)、<sup>41</sup>見返しに附箋(一四・五糶×六・〇糶)、<sup>43</sup>見返し「紅梅」(二三・五糶×三・〇糶)、<sup>44</sup>見返しに附箋(一四・五糶×八・〇糶)、<sup>46</sup>見返しに附箋(一四・八糶×八・三糶)、<sup>47</sup>見返しに附箋(二七・二糶×一一・八糶)、<sup>48</sup>見返しに附箋(九・五糶×六・〇糶)、<sup>49</sup>見返しに附箋(二八・〇糶×一〇・〇糶)、<sup>50</sup>見返しに附箋(二六・八糶×九・五糶)、<sup>51</sup>見返し「うき舟」(八・〇糶×二・八糶)、<sup>52</sup>見返し「かけろふ」(六・三糶×二・三糶)、<sup>53</sup>見返しに附箋(二五・三糶×一四・五糶)、<sup>54</sup>見返し「夢浮橋」(七・五糶×二・八糶)、附箋(一五・〇糶×一〇・〇糶)

第一〇冊目の「賢木」と第一七冊目の「絵合」の本文が入れ替わっている。「賢木」と「絵合」はそれぞれ冒頭が「齋宮」「前齋宮」で始まっているため、改装の際に表紙を付け間違えたか。

印記は、本文部分冒頭と末尾にそれぞれ「日本政府図書」の印があるのみ。第一冊目のみ見返しに「日本政府図書」の蔵書票がある。

## 【書誌】

外題・①「きりつほ 一」左肩無地料紙題簽(一一・三糶×二・五糶)、

②「はゝ木ゝ 二」(同)、③「うつせみ 三」(同)、④「夕かほ 四」(同)、⑤「若むらさき 五」(同)、⑥「すゑつむはな 六」(同)、⑦「もみちの賀 七」(同)、⑧「はなのえむ 八」(同)、⑨「あふひ 九」、⑩「さか木十」(同)、⑪「はなちるさと 十一」(同)、⑫「すま 十二」(同)、⑬「あかし 十三」(同)、⑭「みをつくし 十四」(同)、⑮「よもぎふ 十五」(同)、⑯「せき屋 十六」(同)、⑰「ゑあはせ 十七」(同)、⑱「松かせ 十八」(同)、⑲「うすくも 十九」(同)、⑳「あさかほ 二十」(同)、㉑「をとめ 廿一」(同)、㉒「たまかつら 廿二」(同)、㉓「はつね 廿三」(同)、㉔「こてふ 廿四」(同)、㉕「ほたる 廿五」(同)、㉖「とこなつ 廿六」(同)、㉗「かゝり火 廿七」(同)、㉘「野わき 〇八」(一部欠)、㉙「みゆき 廿九」左肩無地料紙題簽(一一・三糶×二・五糶)、㉚「ふちはかま 三十」(同)、㉛「まきはしら 卅一」(同)、㉜「むめかえ 卅二」(同)、㉝「ふちのうら葉 卅三」(同)、㉞「わかな上 卅四」(同)、㉟「わかな下 卅五」(同)、㊱「かしはき 卅六」(同)、㊲「よこふゑ 卅七」(同)、㊳「すゝむし 卅八」(同)、㊴「ゆふきり 卅九」(同)、㊵「みのり 四十」(同)、㊶「まほろし 四十一」(同)、㊷「題簽欠、㊸「こうはい 四十三」(同)、㊹「竹かは 四十四」(同)、㊺「はしひめ 四十五」(同)、㊻「しゐかもと 四十六」(同)、㊼「あけまき 四十七」(同)、㊽「さわらひ 四十八」(同)、㊾「やとりき 四十九」(同)、㊿「あつま屋 五十」(同)、①「うきふね 五十一」(同)、②「かけろふ 五十二」(同)、③「てならひ 五十三」(同)、④「夢のうきはし 五十四」(同)

内題・なし

表紙・①④⑤④浅葱色表紙(二八・〇糶×二二・五糶)

料紙・楮紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二二・五糎

墨付丁数・①二六丁、②四六丁、③一一丁、④四六丁、⑤四四丁、⑥二八丁、⑦五四丁、⑧一〇丁、⑨四五丁、⑩一八丁、⑪四丁、⑫四二丁、⑬三九丁、⑭三一丁、⑮二二丁、⑯五丁、⑰四七丁、⑱二二丁、⑲二九丁、⑳一九丁、㉑四六丁、㉒三七丁、㉓一四丁、㉔二〇丁、㉕一八丁、㉖二二丁、㉗四丁、㉘一七丁、㉙二六丁、㉚一三丁、㉛三五丁、㉜一九丁、㉝三三丁、㉞三四丁、㉟九九丁、㊱三八丁、㊲一八丁、㊳一四丁、㊴六七丁、㊵一八丁、㊶二〇丁、㊷二三丁、㊸二二丁、㊹三八丁、㊺一〇四丁、㊻三四丁、㊼八二丁、㊽一七丁、㊾八七丁、㊿六一丁、①六五丁、②二六丁、③六四丁、④一六丁

印記・①「日本政府図書」蔵書票（見返し）、①～⑤④「日本政府図書」（一才）、①～⑤④「日本政府図書」（末尾）

#### 【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。江戸時代前期の書写か。

#### 【四七】〔源氏物語〕

写年不明 五一冊

和学講談所旧蔵 「請求番号二〇二一〇三四九」

本資料は和学講談所旧蔵の『源氏物語』の写本。「箒木」「空蟬」「夕顔」を欠き、全五一冊。綴葉装。

浅葱色地の表紙には金泥で秋草文様が描かれ、題簽には雲紙料紙、見返しには布目紙に銀切箔が用いられている。本文料紙も斐紙で、いわゆる豪華本。本文全体に朱書で注釈が施されている。扉に巻名が本文と同筆の手で墨書されている（④⑥のみ欠）。

蔵書印は「書籍館」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」の四種で、押印箇所は冊次によって異なっている。また「書籍館」「和学講談所」の印を欠くものもある（②④⑤）。

第四六冊目の「宿木」のみ改装されており、表紙は香色表紙。扉も改装の際に脱落したと思われる。第八冊目の「花散里」も裏表紙だけ香色のものに替えられている。

第一二冊目「蓬生」の二〇ウ・二一オの見開き箇所が白紙。

第三三冊目「若菜下」の表紙にヤケ。

題簽は雲紙料紙で、脱落したものは外題が中央に打付書されている。

#### 【書誌】

外題・①「きりつほ」中央雲紙料紙題簽（一三・五糎×二・八糎）、②「わかむらさき」(同)、③「すえつむ花」(同)、④「もみちの賀」(同)、⑤「はなのえむ」(同)、⑥「あふひ」(同)、⑦「さか木」中央打付墨書、⑧「花ちる里」中央雲紙料紙題簽（一三・五糎×二・八糎）、⑨「すま」(同)、⑩「あかし」(同)、⑪「みをつくし」(同)、⑫「よもぎふ」(同)、⑬「せき屋」(同)、⑭「ゑあはせ」(同)、⑮「松かせ」中央打付墨書、⑯「うすくも」中央雲紙料紙題簽（一三・五糎×二・八糎）、⑰「あさかほ」中央打付墨書、⑱「をとめ」中央雲紙料紙題簽（一三・五糎×二・八糎）、⑲「たまたかつら」(同)、⑳「はつね」(同)、㉑「こてふ」中央打付墨書、㉒「ほたる」中央雲紙料紙題簽（一三・五糎×二・八糎）、㉓「とこなつ」(同)、㉔

- 「かゝり火」(同)、②⑤「野分」(同)、②⑥「みゆき」(同)、②⑦「藤はかま」(同)、②⑧「まきはしら」(同)、②⑨「むめかえ」(同)、③⑩「ふちのうら葉」(同)、③⑪「わかな 上」(同)、③⑫「わかな 下」(同)、③⑬「かしわ木」(同)、③⑭「よこ笛」中央打付墨書、③⑮「すゝむし」中央雲紙料紙題簽(二三・五糎×二・八糎)、③⑯「夕きり」中央打付墨書、③⑰「みのり」中央雲紙料紙題簽(二三・五糎×二・八糎)、③⑱「まほろし」(同)、③⑲「にほふみや」(同)、④⑰「こうはい」(同)、④⑱「たけ川」(同)、④⑲「はしひめ」(同)、④⑳「しゐかもと」(同)、④㉑「あけまき」(同)、④㉒「さわらひ」(同)、④㉓「やとりき」(同)、④㉔「あつま屋」(同)、④㉕「うきふね」(同)、④㉖「かけろふ」(同)、④㉗「手ならひ」(同)、④㉘「夢のうき橋」(同)
- 内題・①「きりつほ」、②「わかむらさき」、③「すゑつむ花」、④「もみちの賀」、⑤「花の宴」、⑥「あふひ」、⑦「さか木」、⑧「花ちるさと」、⑨「すま」、⑩「あかし」、⑪「みをつくし」、⑫「よもきふ」、⑬「せき屋」、⑭「ゑあはせ」、⑮「松かせ」、⑯「うすくも」、⑰「あさかほ」、⑱「乙め」、⑲「玉かつら」、⑲「はつ音」、⑲「こてふ」、⑲「ほたる」、⑲「とこなつ」、⑲「かゝり火」、⑲「野わき」、⑲「みゆき」、⑲「ふちはかま」、⑲「まきはしら」、⑲「むめかえ」、⑲「藤のうら葉」、⑲「わかな 上」、⑲「わかな 下」、⑲「かしは木」、⑲「よこふえ」、⑲「すゝむし」、⑲「夕きり」、⑲「みのり」、⑲「まほろし」、⑲「にほふ宮」、⑲「こうはい」、⑲「たけかは」、⑲「はしひめ」、⑲「しゐかもと」、⑲「あけまき」、⑲「さわらひ」、⑲「あつみや」、⑲「うきふね」、⑲「かけろふ」、⑲「てならひ」、⑲「夢のうきはし」

表紙・浅葱色地金泥秋草文様表紙(二四・〇糎×一七・〇糎)(④⑥のみ香色表紙)

料紙・斐紙

匡郭・無辺無界

行数・每半葉一〇行

字高・二〇・五糎

墨付丁数・①二六丁、②四五丁、③三一丁、④二八丁、⑤二二丁、⑥四五丁、⑦四七丁、⑧五丁、⑨四三丁、⑩四二丁、⑪三三丁、⑫二五丁、⑬六丁、⑭二二丁、⑮二三丁、⑯三三丁、⑰二二丁、⑱四九丁、⑲四〇丁、⑳二五丁、㉑二〇丁、㉒二二丁、㉓二三丁、㉔五丁、㉕二〇丁、㉖二九丁、㉗一五丁、㉘三九丁、㉙二〇丁、㉚二五丁、㉛一〇七丁、㉜一〇三丁、㉝四一丁、㉞一九丁、㉟一六丁、㊱七〇丁、㊲二〇丁、㊳三三丁、㊴一四丁、㊵四一丁、㊶四一丁、㊷三八丁、㊸三七丁、㊹八七丁、㊺一九丁、㊻九五丁、㊼六一丁、㊽六三丁、㊾五四丁、㊿六三丁、①一七丁

印記・「書籍館」「浅草文庫」「和学講談所」「日本政府図書」

【写年・書写者】

本資料は奥書を欠くため、写年・書写者ともに不明。体裁や筆跡から見て江戸時代前期の書写。